

506

22



始



506-22



金 子 白 夢 者

1 9 2 2

京 文 社 出 版





序に代へて

私は此の書に於て私の乏しい宗教生活貧しい思想生活の感想を書いて見た。體系のない断片語である。併し學的體系のない處にも眞の意味の具體的體系はある。私の思索の辿りは、學的體系を形作らないであらう。併し私の體驗生活には内的に具體的に、私の魂の奥を流れて居る一導の流れがあることを、自分ながら自覺せずには居られない。私は之を體系のない體系と云ひたい。斯うした心の辿りが私の宗教生活の中に私を引き入れ私を動かし、私をして此の書を書かしたものである。私は之を「光に養はれた」生活として感謝し

して居るのである。私は貧しい生活の所有者である。私は乏しい思想の持主である。一切は神の光に導かれ育まれ養はれて生長しつゝあるのである。

私は今此の書を私の愛する若い人々に捧げたい。而して共に新しい道を歩みたい。私の望みはただそれによつてのみ満たされ得るのである。

一九三二年一月二十四日

著 者 識

光に養はれて

目 次

第一編 南窓の下にて

生活の破壊と建設と	一
思想の生活化	六
文化問題——常識よりの解放	二
経済より宗教へ	一六
詩の復活——人間本位の生活	三
新知識に生くる若き姉妹に	二六
ホキットマン	三三
目 次	一

光に養はれて

ラスキン 三七

文化と生活 四一

生活の純化 四六

夢の問答 五六

ミルトンのコーマス 六二

經濟生活と文化生活 六五

寸語寸韻 六九

詩禪一味 八八

第二編 生活の種々相

(一) 愛の生活 九六

(二) 悲みに生くる生活 九八

(三) 私の讀書生活 一〇一

(四) 神祕の生活 一〇

(五) 思ふ儘の生活 一〇三

(六) 土に親む生活 一〇六

(七) 深く生くる生活 一三〇

(八) 心證の生活 一三四

(九) 思索の生活 一三八

(十) 歡喜の生活 一三二

(十一) 古典生活 一三五

(十二) 深い戦ひの生活 一四一

(十三) 夢見る生活 一四五

(十四) 懺悔詩人の生活 一五一

光に養はれて

四

(十五)私の思想生活……………五九

(十六)象徴の生活……………一六三

(十七)聖なる闇の生活……………一六八

(十八)「私」に徹した生活……………一七三

(十九)自由人の生活……………一七七

(二十)哲人の生活……………一八〇

第三編 現實の彼岸より

創造の歡喜……………一八五

生命の豊かさ……………一九五

詩と宗教と……………二〇四

心證 語……………二二一

一步一躍……………二三九

斷想 語……………二四一

カーペンターの藝術思想……………二五三

タゴールの自然觀と其の詩……………二六一

目次終

目次

五

光に養はれて

金子白夢 著



第一篇 南窓の下にて

生活の破壊と建設と

「一粒の麥、地に落ちて死なずば唯だ一つにて在らん。若し死なば多くの果を結ぶべし」とキリストの教へ給ふた言葉は私共の生活の中心を流れて居る深い生活の流れである。

此の思想のうちには「死」が更に新らしい「生」を産むことを暗示して居る。生活の破壊より建設へ行く途が此の中に開けて居る。

南窓の下にて

今の私共の生活は過去の習慣や法則に圍まれたり支配されたりして、一步も新しい生活に歩みを運ぶことができないではないか。

現象界の經驗生活に許り眼を奪はれて了つて、その妖光に酔はされて了つて、更に高い實在の世に眼を轉じ得ないで「平俗」^{グロスマイネ}の境に墮しながら、自己獨自の生活を見出し得ないで居る。否、さうした生活を與へられずに居る。

來るべき生活は全く斯うした「平俗」の生活から解放されて、否、自ら斯うした生活を破壊して、純眞な生活を私共自身のために自ら建設しなくてはならぬ。

ゲエテが『ファウスト』の中に於て、見えざる世界から響いて來る「神靈」^{ゴイステル}の合唱を歌つて居る。“Weh! weh! Du hast sie zerstört, die schöne Welt, mit mächtiger Faust; sie stürzt, sie zerfällt; ... Mächtiger der Erdensöhne, prächtiger baue sie wieder, in deinem Busen baue sie auf! Neuen Lebenslauf besinne mit hellem Sinne, und neue Lieder tönen darauf!” 「悲しうことには! 悲しうことには! 御前は

強い拳をもつて、美しい世界を壊した。世界は潰れた、世界は崩れた。地上の子のうち最も力強きもの、再び世界を、最も莊嚴に建築せよ。御前の胸のうちに世界を建築せよ。御前の晴れやかな氣分で、新しい生の歩みを始めるがいい。そこで新しい歌が響くのだ。」

「新しい生の歩み」を始むるところにのみ私共の生活がある。此の生の歩みは、斯うした生活の建築は「半は神なる人」^{ハムゴット}にして始めて可能である。

さらば如何にして謂ふところの「半は神なる人」となり得るか。私共の凡てが上りの光に照らされて、養はれて、育まれて、即ち「神によりて生れ」なくてはならぬ。一切を神に捧げ、此の肉と、此の靈と、此の富と、此の智とを神の器として活動するところにのみ、私共の純眞の人間性が生れて來るのではあるまいか。茲に「半は神なる人」が産聲をあげるのではあるまいか。

更に具體的に之を表現すれば、我等の生活を、單なる食物の爲めや、單なる衣服

や、住宅や、交際やのために、それらの満足のためにのみ生きろやうな生活ではなくして、寧ろさうした生活から死んで、純眞の自己要求の深い生活を、廣い奉仕生活と深い内部生活とに見出して、私共の「生の歩み」を新らしく「高い永遠の世界」に向けて進み行く生活に生さねばならぬではないか。

斯うした奉仕生活と内部生活とは決して二つの道ではない。實は一つの道である。生活が神に結ばれて居るものにとつては、此の二つの道が、神に於て一つになり得るのだ。

自己に對する内部生活の中に神を尋ね、社會に對する奉仕生活の中に神を現はすと云ふ事は、藝術的に之を言へば、直觀生活がやがて表現生活であつて、直觀と表現とが二つであつて即ち一つであると同じ通りではあるまいか。自己に即した社會であり社會に即した自己であるからして、此の自己對社會の關係は、眞の生活に於ては、少くとも體驗に於ては一つであるべき筈だ。

實際に於て私共の生活に斯うした自己對社會の關係に矛盾があり衝突があり葛藤があり争闘があるのは、どちらか其の一方若しくは兩方に於て、その本來の道を失つて邪道にそれて居るが爲めである。

自己が社會となり、社會が自己となつたときには、キリストの所謂「ついに、一つに」と云はれた祈りの成就されたときである。人間生活が斯うした境地に達したときこそ人は眞の意味に於て「人間」(Mensch)である。私共の憧れて居る文化生活に於ける「文化人」——真人——は斯うした神の中に生くる人の生活である。

破壊の道よりして、建設の道へ出づる此の一路は、古聖が「法々塵々是光明」と云つたところの境であつて、一切の人間生活の辿り行くべき目標である。

キリストが「聖國を來らせ給へ」(Dein Reich komme)と云つた人間の至高理想の要求は此の精神を吾等人類の唯一無二の生活の光明として闡明したものに外ならな

思想の生活化

「君は思想上の問題許り語つて居るが、實生活は君等の空想して居るやうには行くものではない。」

私は斯う云つたやうなことを幾度か私共のうへに、浴せかけられた苦い經驗を有つて居る。

その度毎に私は思ひ返へした。思想は單なる空想だらうかと。幾度思ひ返へしても、私にはさうは考へられない。併し世の中には斯うした考へを有つて居るものも尠なくないと見える。嘗て西田幾多郎先生がその「善の研究」のなかに於て「思索などする奴は縁の野にあつて枯草を食ふ動物の如しと、メフイストに嘲らるるかも知らぬが、我は哲理を考へる様に罰せられて居ると云つた哲學者もあるやうに、一たび禁斷の果を食つた人間にはかゝる苦惱のあるのも己むを得ぬことであらう」と

云はれて居るのを見ても、思索生活を枯草を食ふ生活だと思ふものは、強ちメフイスト許りてはあるまいと思はれる。

併し私には思索すると云ふことはそれが其の儘に人間生活の實生活の一つだと外考へられない。

思索のない生活には眞の體驗がない。體驗がない生活は生活としての價値がない。

思想上の思索生活を實際上の生活より切り離した生活。若しくは實際上の生活を換言すれば内生活と外生活とを全く違つた二重生活として取扱つて居る生活のなかには、眞の深味のある生活としては價値がない許りてなく、斯う云ふ生活は生活として意味がない許りてなく、斯う云ふ思想は思想としても無意味である。

思想が直接に私共の生活に肉薄し、實生活のなかに思想が職り込まれて、思想が生活となり、生活が思想から來るときに、私共はそこに純眞な生活の脈動に觸れる

のではあるまいか。さうした生活が生命に體驗づけられた生活とでも云はうか、思索即體驗の生活である。

生命の脈動に觸れない、單なる外部的な生活が、淺薄な唯物觀的な巧利的實用主義に支配されて、何等の深みのない、ゆとりのない、沒趣味な、荒み果てた生活を私共の前に生み附けて居ると云ふ、現代生活の慘めさを眼前に見せつけられて居る私共は、斯うして生活に對して一種深刻な悲哀を感ぜずには居られない。

斯うした現代思潮がどう云ふ方向に流れて、如何なる結果を將來するかと云ふ文化問題に對して、私共は慎重に考へもし觀察もせねばならぬと思ふ。新文明の曙光は、斯うした思潮を根本的に改造し超越したところからのみ生れて來るものではないからうか。

此の思想上の根本改造は、民力涵養位の手温い態度や、偏見な國家主義鼓吹や、日蓮主義唱導位の時代錯誤では到底解決のつくものではないと思ふ。

深い／＼人間生活のどん底に流れて居る見えざる流れを徹見し得る豫言者の偉人の直覺眼によるにあらざれば、到底其の真相を闡明し、其の解決に一閃光を放つことは不可能である。

「獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや。主エホバもの言ひ給ふ、誰か預言せざらんや。」(アマモス書三ノ八) 靜かなる天の聲を聞いて、内部生命に燃ゆる焔を有つて居るものでなくては生活のどん底に新らしい火を投げ入れることは六ヶしい。

「われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふ勿れ。反つて劍を投ぜん爲めに來れり」と云ふ(太十ノ卅四) キリストの大獅子吼は現代生活の廓清にも必要だ。

根本廓清の第一次的生活に必要なのは言ふまでもないが、私は第二次的生活として、先づ藝術の眞の理解を國民生活改造の第一着手として提唱したいと思ふ。藝術生活が私共の實生活の根底を如何に基礎附けて居るかと思ふことを先づ第一に味ひもし理解もせねばならぬと思ふ。

生活が思想と融合して生れ出でたものが藝術である。此の意味に於て藝術の生活が私共の實生活の中に深く喰ひ込んで來なくては生活を改造することはできない。而して眞の國民文學が生れない以上は國民思想の統一も國民文化の歸一も覺束ない譯である。

藝術を遊戯視し、藝術家をまだ藝人視して居る現代の日本は眞に呪ふべきではあるまいか。私は呪ひのなかに深い愛を捧げねばならぬと思ふ。惡む爲めの呪ひや、呪ふための呪ひは私共の取るべき態度ではない。私共はどこまでも愛するための呪ひでなくてはならぬ。私共は深い同情の眼を擧げて我々を「呪ふ者を祝せよ」(羅十二ノ十四)と云ふ古聖者の教へによつて彼等のために祈り求めねばならぬと思ふ。

深い思想に生きる國民を生むためには、先づ自らが深い思想に生きねばならぬ。私は此の點に於て、根本問題として「人生其物」に觸れる教育の開始より着手するにあらざれば一切は無意味だと思つて居る。

人生教育！ さうだ、私共の理想は此の一點に集中して居ると云つていい。此の中心點を外にして教育はそれが如何に組織に於て制度に於て教授法に於て整頓して居つたところで駄目だと思ふ。科學上の知識教育も、倫理上の精神教育も、乃至は教權上の宗教教育も、何等の生きた光を人間生活そのものに與へるものではない。

囚へられた教育家宗教家は、先づ從來の迷想から覺めねばならぬ。「人生」そのものが如何に深く我々の生活を豊かにすべきものであるかと云ふ事を、私共は深く考へねばならぬ。而して其の『眞』を握つて生活の中にそれを生かさねばならぬ。

思想の生活化は、思想の生活化ではなくして、生活の生活化とならねばならぬ。私共の生活はまだ生活化して居らない。生活がまだ始まつて居らない。新しい生活はこれから其の第一歩を始むるのだ。第一歩！ そこに未踏の新領土が横はつて居る。私共の進むべきはその新領土のみである。

文化問題 —— 常識よりの解放

現代の文化を如何にすべき。私は今此の問題に觸れて見る。英語の所謂 *Civilization* が若し物質的文化を意味するとすれば、獨逸語の所謂 *Kultur* は精神的文化を意味して居る。私は物質上に於ても精神上に於ても、私共は俱に文化問題に關する理解を有せねばならぬと思ふ。科學が提供する物質文化の生活内容を充たすものはどうしても精神文化の生活でなくてはならぬと思ふ。

現代人の生活がどれだけ物質文化と精神文化とを自己生活のなかに活かして居るか。これは頗る大なる疑問として私共の前に残つて居る。私は精神文化から打切られた断片的な物質文化ほど惨めな生活悲劇はあるまいと思ふ。

藝術のない單なる物質生活。哲學のない單なる物質生活。宗教のない單なる物質生活。私は斯うした謂ふ所の物質文化の單なる生活に生きる人々の生活を想ひ見て悲

しまずに居られない。斯うした生活は眞の生活文化價值から見れば、血の通はない肉のない呼吸の止まつて居る生活の死體に過ぎないのではないか。

詩人シルラーが「我等が人を福にするところそこに我等の祖國あり」*„Wo man beglückt, ist man im Vaterland.“*と歌つて高い人間精神の教養を語り、心靈の高擧を説いたのは、眞の意味の文化を暗示して居るではなからうか。私共の生活を祝福し、淨化し、向上し、莊嚴化するところにのみ私共の眞の文化生活の本來の面目が現はれて來るのである。

私共は常に謂ふところの一般普通の意味の「常識」の世界に住んで居つて、そこを我が生活の故郷とばかり思つてそれ以外に一步も足を踏み出すことをしない。「常識」に忠なるものを以て祖國に對する愛國者の如く感じて居るのであるが、豈計らんや「常識」の世界こそ私共の魂に取つては異郷の旅である。彼等はそこを異郷とも知らず放浪より放浪へとさまよふて居る。而して眞の文化のパンを食ふべく餘り

に飢え過ぎて居る。而かも彼等自らが「常識」のために満腹して自らその飢えを感じないほどそれほど惨めな生活に墮して居るではないか。

今や私共は「常識」の豆殻に目覚めねばならぬ時が来たのだ。私共は最早心靈の祖國に歸らねばならぬ時が来た。そこにのみ私共の魂の飢えを満たすべき「食物」があるのだ。そこにのみ私共の永久の平和を味ふべき「本來の祖國」があるのだ。バイブルの放蕩兒がデカダンの生活をやり盡くした後ち、一切のものを失つて食ふに物なく顧みる人なき状態に陥つたとき「自ら省みて」……「我天と父との前に罪を犯したり……いざ歸らなん」と云つて神に歸つたやうに、現代人も「常識」のデカダン生活から目覺めて、單なる物質の生活から離れて、精神の故郷へ歸らねばならぬ。そこにのみ眞實の自己完成、眞實の圓滿生活が實現されるのである。

「常識」の世界から見れば影の國土にしか見えない此の精神の國土こそ、眞の國土、理想の國土でなくてはならぬ。常識の世界は「死」の國土である。本來の祖國は「生」の淨土でなくてならぬ。

現代文化が宗教的一面の憧憬を追ふて斯うして國土を目指しつゝ、故郷に歸り行く傾向を示しつゝあることは私共の喜びとするところである。私共は今新しい運命の手に導かれつゝあるのだ。これが否むことの能きない自由の道だ。何んと云ふ「朗快な世界」だらう！ 何んと云ふ「活き／＼した郷土」だらう。私共凡てが生れ故郷たる魂の國へ歸つて行く喜び、共に「生」の歌を歌つて歸る悦び、さうした喜びのなかにのみ生活が匂ふて居るのだ。

此の夢のやうな「事實の世界」——さうだ眞の事實は斯うしたところにのみ現はれるのだ——を實現することその事が私共の眞の仕事でなければならぬ。換言すれば藝術と、哲學と、宗教との三者が互に手を取り合つて「生活に奉仕する」と云ふ時代を生まねばならぬ。これが眞の意味の文化運動である。(リツケルトなどの價値哲學が基礎附づる意味の文化と云ふ概念は暫くここには略することとする。)

斯うした文化運動は科學が生んだ物質上の生活即ち便利と實用との實生活と決して相背馳するものではなくして、却つて斯うした生活を基礎づけ内容づけ價值づけるところのものが文化生活でなくてはならぬ。斯うした意味の文化生活即ち價值內在の内面生活がなくては、物質上の科學文化は眞に生きて來ないのである。

先づ文化運動の白熱的生活に生くるために、私共は端的に自己生活に目覺めねばならぬ。人間それ自らの生活に生きなくてはならぬ。自己自らの崇高なる「本來像」(Urbild)を眺めなくてはならぬ。自己生活が神化しなくてはならぬ。そこにのみ「生活」が藝術と哲學と宗教とによつて内容づけられるのである。

經濟より宗教へ

經濟生活が人間生活の慾望を満足せしむべきものであることは既定の議論であるが、人間生活が經濟生活によつて、一切の慾望を満足せしめ得るのであらうか。

これは未決の問題である。

現代教育と現代生活が經濟生活によつて、人間生活の一切を満足せしむべく豫想したところに、現代文明の驚くべき破綻の端緒が秘められて居つたではないか。

歐洲大戰を大詰として新らしく開かれた世界劇の序幕は、私共に經濟生活より更に一步深く、人間生活の歩みを「宗教へ」と云ふ世界へ轉向せしむべく、その新しい光を暗示して居るではないか。

經濟生活より宗教生活へと云ふ辿りは、何も新らしい辿り方ではない。古の聖者が「汝等神と富とに兼ね事ふること能はず」と云つた生活法が斯の眞實の生活法を私共に語つて居る。

「兼ね事ふること能はず」とは決して經濟生活を否定した見方ではない。茲に「事ふる」は宗教的に云へば「禮拜する」の意味であり、現代語で云へば「奉仕する」の意味である。私共は「富神」を神として禮拜する譯には行かない。經濟生活は生活

そのものの第一義諦のそれではない。マルクスの唯物史観を以て経済生活が宗教生活と矛盾するが如く考ふる見方の誤りはここに其の弱點が潜んで居ると思ふ。私共はマルクスの云ふやうに「物質的生活の生産方法」が一般に社會的、政治的、及び精神的の生活過程を條件づければとて、直ちにそれを以て一切生活——然り精神生活までの——基礎若しくは必要件としての唯物史觀的經濟生活を肯定する譯には行かない。成る程マルクスの云ふやうに「社會上の諸關係は生産上の動力に密接の關係を有する」は勿論、「人が新規の生産動力を獲得すると、それに伴はれて生産方法は變改され」ることも當然の結果であり而して又、「生産方法の變改は従つて人々の生計狀態の變改は必然に總ての社會關係を變改する」に至るも見易き理路ではあるが、さればとて生産方法の變改を以て一切の人間生活の變改の根本動力とする譯には行かない。マルクス自らが明言して居るごとくこは單に人間の「社會關係」に變改を與ふるに過ぎないのであつて、人間生活の精神方面をもこれに包容して居ると云ふ

のではない。スバルゴーが言ふ如くマルクスの唯物史觀はその唯物史觀たるの故を以て直ちにそれが宗教生活をもその見方に於て規範すると云ふのではない。若し經濟生活に對するマルクスの見方を以て直ちに宗教生活をも規範し得べしと見るものがありとすればそれは未だマルクスに徹した見方ではあるまいと思ふ。

私の見るところでは人間生活其のものの第一義諦は「神に事へる」事だと思ふ。即ち一切生活の歸結は宗教生活でなくてはならぬと思ふ。キリストが「まづ神の國と神の義とを求めよ」*“But seek ye first his kingdom and his righteousness.”* と云はれた言葉が最も深く人間生活の眞諦を道破した言葉だと思ふ。獨逸譯に従へば

“Trachtet am ersten nach dem Reich Gottes, und nach seiner Gerechtigkeit.” であつて「先づ神の國とその義とに對して努力せよ」との意である。「求めよ」と云ひ「努力せよ」と云ふ何れも之に對して全身全力を捧げて生くる生活態度を云ふのである。生活の中心目的をそこに置いて生くる所にのみ人間生活の意義がある。神なき生活、

は生活でない。如何にそれが所謂經濟生活に於て豊かであつたとしても、それは眞の意味の「生活」ではない。寧ろ物理上の運動若しくは生物學上の生存である。個性上の價值を有する人格的生活は宗教を外にして意味がない。

何が故に宗教生活が生活の第一義諦であるか。宗教生活のみが人間生活を統一化し、純化するからである。藝術生活が生活を美化し、倫理生活が生活を善化し、科学や哲學生活が生活を眞化すると言ふまでもない。併しながらそれらの眞善美の生活も要するに神の生活の一部面的生活であつて、その全的生活としては宗教を待つて始めて統一化され純化されるのである。是の意味に於て一切生活の歸一は宗教である。

宗教は人間の部分的生活ではない。宇宙の本源たる實在者と自己との融會道交によつて我等の全人格がそこに統一的純化の生活を始めて來る。そこに宗教がある。内面的に言へば謂ふところの眞善美の生活意識を内容として私共の生活が超感覺的

に渾一生活に活きたときに宗教が目覺める。

此の渾一生活をばウインデルバントは「聖」^{グスハイヤーゲ}の生活と云つて居る。此の「聖」なる生活の世界に於てのみ、人間は假現の生活を去つて純眞の自己に歸り得るのである。純眞の自己に歸つて内部生命の光明を如實に發揮する生活にのみ意義ある生活が表現される。

所詮私共は本來の生活に立歸らねばならないではないか。禪者は「本來の面目」を把住せよと云ひ、基督者は「神に歸れ」と云ふ。要するところは眞の自己に活きる生活に外ならない。

現代生活が欺かれたる外部からのみの生活に引きづられて來たと云ふ悲劇に目覺めて、單なる經濟生活から宗教生活へ歸り行く所に、眞の文化がその第一曙光を放つのである。

自由な平和な愛の生活のなかに呼吸を始むる人間生活。そこにのみ宗教生活が私

其の生活に化つて来る。

要するに宗教は「生活」である。生活のあるところに宗教がなくてはならぬ。生活が宗教と化つたときに宗教が生きたのである。宗教が生活と化つたときに生活が生きたのである。

詩の復活 人間本位の生活

新らしい文明が來かけた。詩の復活がその曙光を放つた。散文的な文明に荒びた私共の魂は新らしい潤ひに濡れかけて居る。

文明批評眼から見て、物質文明の破綻を意味した歐洲大戰の大詰がその幕を下した今、この今と云ふ瞬間から私共は新文明の第一歩に足を踏み込んで居る。

新文明の第一歩とは？ 詩の復活である。文明が詩のなかに呼吸を始めて來たのである。過去半世紀の間、散文文明の代表藝術たる文藝が自然主義、寫實主義、印

象主義、後期印象主義、象徴主義、神祕主義とそれからそれと色を變へ姿を變へて人間生活を描いて來たのであつたが、其の基調をなしたものは要するに「科學」と實生活に流れた「現實」の姿とに過ぎなかつた。過去半世紀の一切の文明の潮流は科學の變體か若しくは現實の書き替へに外ならない。宗教も、哲學も、藝術も、經濟も、政治も、戦争も、商業も、あらゆる生活が——現實の諸相が——科學の假相劇に過ぎなかつた。文明は科學の魔酒に全く酔ふて了つた。

今や文明は再び科學の手から「人間」の手に歸つた。物質より精神へ、散文より詩へ、石よりパンへ、機械より人格へと云ふ道が漸く開けかけて來た。

これを哲學上の方面から見ても、從來の概念的抽象的な見方が體驗的直覺的な見方に變り、政治上の方面から見ても、軍國的官僚的な方針が全く人道的なデモクラチックな見方に變つて來た。一切が人間本位、眞の意味に於ける生活本位の傾向を見せて來たではないか。

私の謂ふところの「詩」とは人間本位の生活そのものを云ふのである。活きた生活のリズムそのものを外にして眞の詩はあり得ない。否、詩を外にして生活はない。生活がその純眞の境に達すれば人間性それ自らに内在する宇宙的生命がその本然の姿をリズムミックに發露せずには居られない。生活の藝術化ではない。生活即藝術である。ここには「詩」と「生活」とは二にして不二と云ふ一如の境を辿りつゝある。「詩」と「生活」とは「人間」をはらからとする姉妹である。「詩のない國家は亡ぶ」と云ふ深い徹底した意味を眞に理解する國民でなければ大なる理想を生み得ない。

ホキットマンを生み得た米國は、彼一人によりて世界的の一大理想を人類に鼓吹して居るではないか。ヴェルハアレンを生み得た白耳義は小國と雖も猶世界的權威を精神の世界に保ち得るではないか。人間の眞の偉大さがその人格の内容にあるやうに、國家の眞の偉大さも、その國家の内容たる偉大なる理想にあるではなからうか。大なる理想を生む努力。これが私共の仕事ではないか。夢のない國、幻を有たな

い國民は、到底偉大となり得ない國であり、偉大となり得ない國民である。

私は平凡、俗惡、淺薄を意味するやうな氣分に充ちた誤解されたデモクラシーの流れが政治上乃至は社會上の薄つぺらな一時的流行語と化しつゝ、行く現代の惡傾向に對しては尠なからず物足らなさを感じて居るもの寧ろ悲んで居るものであるが、併しながら私は決して眞のデモクラシーの流れに反對する者ではない。眞のデモクラシーの流れのどん底には「人間の神性味」とその本來の「永遠性」とが輝いて居る筈である。斯うした人間の「神性」と「永遠性」とを理解し體驗せずして、詩と宗教とに對する眞の深い理解と體得とを有せずして徒らに政治を云爲し、空しく改造を叫び、誤つたデモクラシーを眞似る似而非文明論者の多い今日、私共は新らしい意味に於ける眞の「生活の詩」を味ひ、ここに無限の人間味を掬し得る新文明を生み出さなくてはならぬ。詩の復活は人間生活の復活でなくてはならぬ。

新知識に生くる若き姉妹に

私は高女教育位な低い程度の教育に對して「高等」と云ふ立派な文字を冠らせて、人を欺き自らを欺くやうにしたのが、抑今の女子教育の根本的な誤りだらうと思ひます。今の所では高女教育は普通教育にも足りないのです。私の希望を率直に言へば女子教育は男子教育と同じ程度のものでなくてはならぬ。男子が大學程度の教育を要するなら、女子も大學程度の教育を要するのであります。

然るに困つた事には、今日の場合、高等教育を受けた男子側でさへも、女子は手紙の一つも書ければいいんだ餘り知識があると御し悪いとか脱線して困るとか云つて、男子自らが至極低級な要求に満足して、先づ優しくて、美しくて、常識があつて、健康なればそれで満足だとか何とか云つて居る。斯うしたあはれな男子のある間は日本の女子教育はいつまでたつたつて目覺むる時がありません。

今日女子高等教育が更に一段の進境を見得ないのは、要するに男子側の要求の聲が低いからであります。私はもつと／＼高い要求が生れて來て、互に異性に對してさうした要求を有つやうになつて來なくては、逆も教育に於ける向上も見られないし、私共の生活内容の充實や品性の向上や、趣味の高化は期する譯に行かないだらうと思ひます。

幸ひに此の頃は婦人方自らが次第に目覺めて來られたので、自らが自らを向上させて行く道をお進みになつて居らるので、非常に喜ばしい現象であります。私はどうか斯うした氣運が女子自覺の第一聲となつて來ると共に、男子自らの要求が更に一段高くなつて來ることを熱望して居ります。

文藝なり、美術なり、音樂なり、科學なり、語學なり、宗教なり、哲學なり、乃至は政治、經濟、社會上の問題、時事問題、それ等の一切の問題に對して一と通りの知識と趣味とを有し、互に語り合ひ批評し合つて、新らしい生活のなかに新らしい

空気を呼吸しながら、芳醇な人間味を享樂すると云つたやうな所にのみ、私共の眞の文化生活があるではありませんまいか。さうしたところからのみ家庭教育も児童教育も本統の産聲を擧げてくるのです。

眞の深い教養に志す方々、新しい知識慾に燃えて居る方々に申し上げます。どうかあなたがたが偽らざる内部の溢れ出づる要求の力に目覺めて男子の高い要求を呼び起して下さい。男子を呼び覺ます力はやがて社會を目覺ます力です。而してあなた方御自身を救ふ力です。

私の最も慕うて居る新知識に生きやうとせらるる婦人方。あなた方にもう實際目覺めて來ました。私は喜ばずに居られません。私の胸の躍るのを禁じ得ないので、古い思想や知識であなた方を壓しついたり支配しやうとすることは到底もう出來なくなりました。またさうしたことであなた方を強ゆることは絶対に六ヶしいことになりませんでした。知識や思想があなた方の燃ゆる要求にびつたり合ふやうなものでなく

ては、あなた方の要求に満足を與へ得ないことと思ひます。今は新しい生き方をせねばならぬ時になりました。

私は「新しい生きかた」と申しました。さうです。新しい生きかたでなくてはなりません。併し單に新しいと云ふことが何もいいとは限りません。新しくとも生きてないものは駄目です。何等の力もないのです。新らしくて、而して生きて居るものでなくてはなりません。

私共が斯うした新しい生きかたに觸れるのには、どうすれば可いかと云ふに一體人間は對立的な生活の中に生きて行くものであります。對立的な生活と云ひますと女性は男性に對し、男性は女性に對して生きると云ふ生きかたを意味する生活のことです。斯うした生活交渉があつてこそ人間生活に意味があり價值があり生命があるのであります。若しも人間生活が單に男子は男子、女子は女子と互に孤立的な生活状態であつたならば、永久に人間生活はその興へられた生活を完成するこ

とが能きないのであります。斯うした對立生活の活きた關係を圓滿に關係附けるところにのみ生活の完成が期せらるるのであります。然るに今日までの状態では斯うした相互關係が社會生活のなかにも家庭生活のなかにも實現されなくて、婦人は一種の奴隸でなければ一種の機械であつたのです。私は斯うした状態から目覺めて來られた婦人方に對して敬意を表さずに居られませぬ。併しながらさうした自覺や知識や教養と云つたやうなものが、單に女性其者に取つてのみの必要であつたり自覺であつたりするならば、即ち孤立的自覺であつて些の男性との生きた生活關係に交渉を有ち來たさないものであつたならば、それが如何に深い知識であり如何に人間味を有つて居るとしたところが、それは眞の意味の人格とはなり得ないものだらうと思ひます。「人獨なるは善らず」*“It is not good that the man should be alone.”*と神の言はれた言葉は單に男子に對しての言葉だけでなからうと思ひます。英譯が *the man* と云つたのは人間全體に對して語つて居るのであります。即ち女性も男性

なしに生活し得ないのは男性が女性なしに生活し得ないのと少しも變りはありませぬ。否兩者孤立の状態に於ては人間生活は決して「*全人間*」の生活となり得ないのであります。男性なしの女性生活の不完全なる如く、女性なしの男性生活も不完全であります。どうしても兩者は對立的關係に於て生活に活さねばなりません。換言すれば女性は女性に生くることによつてのみ其の個性を發揮し男性を生かし得るのであります。男性は男性に生くることによつてのみ其の個性を發揮し女性を生かし得るのであります。ここに「*新らしい力*」の泉が流れて居らねばなりません。私共男子許りが獨りよがつて居つたところで到底本物になれないやうに、女性の孤立は女性の亡びであります。

斯うした異性對立の關係は、分化より統一に行く人間生活の神祕な消息であります。私は神が人間を男女にお創りになつた深い御聖旨に對して驚きと喜びと感謝の念に溢れて居ります。

然るに今日の私共の實生活の現状を見ると私共はどうしても泣かずには居られません。叫ばずには居られません。此の儘にじつとしては居られません。私共の眼に映ずる今日の女子教育の程度では多少教養ある男子に取つては、到底お話相手にすらならないのであります。失禮な言ひ方ではありますがまだくく婦人方の教育は低級なものです。

先づ文學、哲學、宗教等の人間本位の最高知識に就て深い教養が必要です。男子に取つてもさうですが私は寧ろ婦人に取つて斯うした思想なり趣味なり信仰なりが最も必要だと感じます。活きた生活の活きた生命となる此等の教養が、私共の家庭生活なり、社會生活に生命を有するやうになるには、もつとく婦人方の覺醒を要せねばならぬのでありませう。あなた方が徹底的に目覺るることによつてのみ國家の前途も人類の平和も本統に期し得らるのであります。

ホキットマン — 誕生百年記念 —

黎明期の文化を飾るべきデモクラシーの世界的思潮が洪水のやうに溢れ來つた今日、茲に私共はデモクラシーの詩人ホキットマンの誕生百年を記念するは意味あることである。

Victory, union, faith, identity, time.

The indissoluble compacts, riches, mystery,

Eternal progress, the cosmos, and the modern reports.

This then is life,

Here is what has come to the surface after so many, throes and convulsions,
勝利、聯合、信仰、同一、時間。

光に發はれて

三四

永久不變の誓約、富、神祕。

永遠の進歩、宇宙、及び近代の報告。

これこそは生命である。

茲に幾多の陣痛と痙攣との後に、表面に表はれ來るべきものがある。

と歌つた詩人ホキットマンが紐育州ロングアイランドなるウエストヒルの農舎に呱呱の聲を擧げたのは一八一九年五月三十一日である。單純なる彼の一生はカムデン地方の一小屋に家僕一人と共に一八九一年七十三歳を以て此の世を去るまで、貧しい淡い生涯であつた。「大なる理想」が詩人の天職だと自覺した彼は、その傑作「草グラス、オヴ、ゲラッスの葉」中に於て「生」を歌ひ「喜び」を歌ひ「自己」を歌ひ「平民國」を歌ひ「大道」を歌ひ「男女」を歌つて居る。その他幾多の短編長編の美しい深い而して純な精神を歌つて居る。彼は國家發展の最終目的は「心靈的、神人的」でなくてはならぬと云ふ確信

に立つて居つた。勞働の男や女が彼の詩題の主なものであつた。强健な、純潔な、敬虔な、善良な、自由な精神の所有者を創造すると云ふことが彼の終生の目的であつた。

「我、地上に立つ、何等の莊嚴ぞや」と感じたホキットマンは

Each is not for its own sake,

I say the whole earth and all the stars in the sky are for religion's sake.
なべては自己のためにあるのではない。

私は言ふ、「全地も、天空のあらゆる星辰も宗教の爲めに存するのだ」と。斯うホキットマンは歌つて居る。深い魂の聲を聞いた平民的詩人である。より大なる魄のより大なる抱擁に生きた詩人である。大きな生の海原に溶け込んで其處に魂と魂とが互に囁き合つて居る境に立つた詩人である。ホキットマンは「今」のうちに「永遠」を見、「平凡」のうちに「神祕」を見、「人間」のなかに「神」を見、「肉」のなかに

南窓の下にて

三五

「靈」を見た詩人である。彼は直覺によつて、あらゆる科學者の到達した以上の世界を眺めて、そこに「神の音樂」を聞いた。「一葉の葉は星の萬年の働きにも劣らぬ」微妙な神の力の現はれであることを見た。而して科學者の見る能はざる境地をそこに見た。一葉の葉の「秘密室」は彼に取つては宇宙に於ける造化の最大建築であつた。彼は萬有と抱き、人間と抱き、そこに流れて居る神祕な驚くべき音律に胸を躍らせた。

デモクラシーの使命が、「眞實」と「共働」と「奉仕」との活きた生活の創造にありとすれば、彼は此の三者の對象を人間と自然の何れにも見出して、これを自己生活の中に渾融化した詩人と云つてもよい。「合一!」「進化!」「自由!」これが彼の生活の標語であつた。

黎明の前、彼は丘に立つて満天の星を見渡した。而して自己の靈に言つた。

「自分が天體の凡てを抱擁して其の中の一切の知識と快樂とを獨占することが能き

たら、其のとき自分は満足することが能きだらうかと。」

その時彼の靈は答へた。

「否とよ、自分は其の到達をも全く無視して、更に／＼其の先に躍進するのみだ」と。

無限の躍進! ここにのみ彼れホキットマンの魂の呼吸すべき境地があつたのだ。

「遠く、遠く、遠く」彼は、「無限」そのものを追つて進んだのである。魂のために部分は完成に流れ行き、現實は理想に向つて進むのであつた。我等の詩人は無限の征服者であつた。私共は詩人ホキットマンと共に、斯うした螺旋形の向上の一路を踏んで、現實のなかに深い生其のものの律動を聞かなくてはならぬ。

ラ ス キ ン — 誕生百年記念 —

ラスキンは單に々豪として、文明批評家として紀念すべき價值を有するのみなら

ず。新らしい經濟生活、社會生活問題の提唱者としても紀念するの價值を有して居る。

一八一九年ロンドンにその生の第一聲をあげたジョン・ラスキンは二十四歳の時、其の牛津大學卒業論文「近代畫家論」に於て彼が藝術論の一大光明を放つてより「建築術の七燈」や、「ヴェニスの石」や、「建築と繪畫」や、「技藝の經濟」や「この最後の者にまで」や、「塵の倫理」や、「空氣の女王」や、「セサーミ、エンド、リリーズ」や、「ザ、クラウン、オヴ、ワイルド、オリーズ」等に至るまで彼の七十年の生涯に現はれた勞作の一切には、彼の思想の流れの中に、深い人生に對する親切な理解と、透徹した批評と、深遠な洞察とを見せて居る。

彼は藝術を論じ、その深い審美論を行る間に於ても、決して生きた人間生活を忘れなかつた。此の點に於て彼は倫理的、社會的、宗教的色彩と生命とを離れた單なる藝術に生くる所謂「藝術のための藝術」論者ではなかつた。彼は飽くまで「人生

のための藝術」にその全努力と全生命とを捧げて、藝術に奉仕することその事が、彼に取つてはその儘に「人生」に奉仕することであつた。

道德の囚へられた法則を以て、藝術を律する所謂健全なる思想家の態度は、彼によつて根柢から打破されたが、併しながら彼は藝術を道德乃至倫理の世界と引き離して取扱ふことの、人生の過つた見方であることを徹底的に痛論した。彼によれば圓滿に「美」なるものの中には、圓滿に「善」なるものが存じて居るのだ。人が若し眞に美なるものを知つて、全生命を以て之を愛することを得るならば、その私慾の衝動を防ぎ得るのみならず、その全生活を純化する事が能きるのである。

美によつて一切を純化すると云ふ此のラスキンの態度は、人生の深みに觸れて「善」と「美」との深い核心に於ては、相互に親和し相握手すべき或る神祕の力を見出したのである。この態度からして更に深く人生の活きた現實味に突き入ると、人間生活即ち眞の道德生活の奥には、「美」の鮮かな光が匂ふて居ると云ふところに味

識し體達し來らねばならぬのである。換言すれば「道德は美によつて完成する」のである。

彼は更に此の藝術上の美の力は、直ちに宗教其のものの「聖」の力と、互に相靈交感應すべき消息に觸れて、兩者に對する眞の理解は決して孤立し得べきものでないと提唱して居る。ラスキンの藝術観は美と善と聖との三位一體を體驗的に觀照するに止まらずして、彼は更に此の力を伸べてこれを直ちに實生活の中に集中したのである。藝術論に一世を風靡した彼れラスキンの後半世は、彼のその白熱的藝術論を勞働問題、社會問題、經濟問題の中に開顯した。而してあらゆる方面から彼自らの理想の一大炬火を當時の社會に投げ込んだのであつた。理想論者たりし彼は一躍して實踐論者と化して、生活そのものの改造に努力した。餘りに高がりし彼の理想は當時の社會状態に於ては、一種の幻影ヴァイジョンに過ぎなかつた。併し此の幻影が新らしい色調を帯びて、現レに驚くべき勢力を以て復活しつゝあると云ふことは一大驚異に價

するではないか。私共はここに彼の誕生百年を迎えて、新理想に活きる私共の生活が彼によつて新らしき或物を與へられたことを感謝せずに居られない。

文化と生活

——彼我融合の文明——

生活は價值である。價值のあるところにのみ眞の意味の生活がある。價值の高下は生活の高下を批判する當爲である。當爲そのものが價值自身でなくてはならぬ。

リツケルトが「存在の前に意味がある」*“Der Sinn liegt vor allem Sein.”* と云つた意味それ白らが私共の生活となつて來るときに、私共の生活には内容が能き潤ひが能き生命が漲つて來るのである。

價值に即して生活を考へ、生活に即して意味を味つて來るとゲーテが「ファウスト」の中で奇しくも云つたやうに *“Im Anfang war die Tat.”* 「初めに業ありき」と云ふ事行本位の生活のみが私共の一切の生活を支配して來る。

諸種の時代思想が驚くべき汪溢を極め混亂を生じて居る我邦の現代に於て私共の眼に映する二つの異つた相を有つて居る流れが思想界に漂ふて居る。一つは歐米思想の後に随伴し順應して行かうとするもの、今一つは我に固有して居るものを發揮し闡明して行かうとするもの、前者を呼ぶに「彼」を以てすれば、後者は即ち「我」である。

「彼」の「彼」たる眞諦を掴まずして「彼」を謳歌し之に随伴し順應し、單に之を模倣しやうとする思想上の流れは、思想上の獨自性から見れば奴隸的態度であり屈辱的態度であり盲從的態度である、従つて思想上の墮落であり破滅である。併しながら「我」の「我」たる本來の面目を自覺せず把握せず而も反省せずして「我」を主張せんとするは頑固であり固陋であり狂暴であり自己自殺であり時代錯誤である。

世の或る者は曰く「彼」に従はずんば我等は滅ぶるのみ、我等の行く道は唯だ「彼」の歩みし道を歩むの外に途なしと。勿論一切のものは順應作用によつて自己生存を

持續するものである。順應作用のあるところに生存の保證が與へらるるは生物界の法則であるかも知れない。併しながら全く「我」を棄てて「彼」にのみ従ふと云ふことは到底あらゆる生物の生きて行く道ではない。獨自の生活は茲に其の自己本有の生命を失ふのである。自己本有の生命を發揮し生長させて行く爲にのみ他に順し「彼」に従つて行く意義がある。彼によつて生くるのでない。我をして生きんと欲する意志を完成せしむべく、そのためにのみ「彼」に生きる道を見出すのである。自己に生くるのが目的であつて、彼に生くるのは自己に生きる方法に過ぎない。「彼」にのみ生くることは自己の生命を失ふことである。

世の或る者は曰く「我」に生きる外に生きる道がない。「我」には我に獨特のものあり、之によつて生きよと。さうだ我に獨特のものを自覺し、闡明し、之を發揮し之を向上せしめて生くるや、確かに生きる道である。併し單なる「我」、孤立の「我」、偏狹なる、低劣なる「我」を固持し誇張して、無暗にその獨特性を主張することは、

やがて自己の抱擁性を傷け、感受性を鈍らし、獨善主義の孤立孤獨の境地に自ら陥るものである。斯くては自己自滅である。

私共の生活態度は飽くまで抱擁的であり、積極的であり、自發的であり、發展的であらねばならぬ。眞の意味に於て「我」を生かすには、更に大に「彼」に接し、「彼」を取入れ、「彼」を理解し、「彼」を消化し、「彼」を體驗しなくてはならぬ。同時に「我」そのものの内面生命に面して、その價值を發揮し、純化し、向上し、創造して行かねばならぬ。

「自己が自己を知る」と云ふ自己認識の純眞態度に立つて、私共は私共の生活發展の歴史が私共に提供してくれたものを十分に、公平に、親切に、探り求め、之を實生活に基礎附けて行かなくてはならぬ。概念的の或る型を豫め作つて置いて、我が生活歴史をその型の中に當て筈めやうとするやうな仕方は眞の自己を發揮する道ではないし、又生きる道でもない。私共は時に或る一派の論者や、學者が、斯うした

偏狹なる型に「我」を盛つて、不自然な、非科學的な、時代錯誤的な、偶像的な態度の上に「我」を主張せんとするのを見て悲しまずに居られないのみならず、彼等の態度が自滅に了りやしないかと恐れて居るのである。

私共の周圍には「我」の價值を全く葬り去つて「彼」にのみ盲從して生きやうとする魔酒に酔ふて居るものも尠くないが、その反對に「彼」を全く否定して「我」にのみ執着して生きやうとする無妄の徒も尠くない。私共は兩者その道を失して居ると思ふ。私共はどうしてもさうした無反省な無自覺な態度にはなり得ない。

私は、私自身としては「彼」と「我」とを斯うした違つた姿に於て眺めて行きたくない。私は他に對して排他的な態度にも成り得ないと同時に、心醉的な態度にもなり得ない。私は「彼」と「我」とを二つの異つた黄金の階梯を昇る姉妹の天使だと見たい。事實さうでなくてはならぬ。彼等姉妹は一段／＼と碧の天空を登り盡くして、その頂上に於て互に手を握つて抱擁し合ふ時を待つて居るのではなからうか。「本來

無東西」と云つた古聖の體得底が斯うした文化史上の意味に於て結び付けられたと
きに圓融的文化が生れて來るのではなからうか。

「彼」たる西洋思想と、「我」たる東洋思想とが互に握手し、互に抱擁し合ふ黄金の
階段は來るべき我邦の新文化を象徴し、暗示するものではなからうか。

「彼我の握手」を外にして私共の仕事はないやうにも思はれる。眞の文化に生くる
眞の生活が花咲く頃、その時の準備行動として私共の今の生活が一步／＼歩みをそ
こに運びつゝあるのではなからうか。

我々の使命！ 斯うした大なる言葉が單に空虚な響きではなくて眞實に内容のあ
る底力のあるものとなつて行くと云つたやうな生活に私共は生きて行かなくてはな
らぬ。

生活の純化

私共の生活はもつと純化しなくてはなりません。純化と云ふのは、肉を食ふな、
洋館にも住むなと云ふ單純化の意味ではありません。私の純化と云ふのは、もつと
純眞無雜な生活に歸りたいと云ふことなのです。寧ろ生活の純眞化と云つた方がい
いかも知れません。

私共の日常生活が餘りに外部の力にのみ押しつけられて了つて、自らに生きる
と云ふやうな生き方に乏しいのです。樹木を一本見るにしても、直ぐに經濟的打算的
な利害觀念にのみ支配され易いのであります。

私は樹木一本の中に、木の葉一枚のなかに、活き／＼した新しい生命の呼吸に
觸れるのです。見えざる生命が色彩と云ふ音樂と化つて燃えて居るやうにも感ぜら
るるのであります。あの幹の線や、枝ぶりや、葉の色や形や艶やの一つ／＼の中に
原生命の躍動が永へに新らしい歌を歌つて居るのではありますまいか。彼等は朝日
の光や夕日の光につれて、その樂の音に誘はれてダンスの顫律に調子を合せて居る

のではありませんまいか。

今の私共の生活が餘りに便利や實益や實用にのみ囚へられた結果、私共の魂までが、利害關係や得失の觀念にのみ全く占領されて了つて、一步もそれ以外に足を踏み出すことが出来ないのは、確かに呪はれた生活であります。

私は路傍に横つて居る、名もない一個の小石にさへ、無上の興味を見出すのです。彼が幾億萬年かの永い「時」の流れに漂はされながら、美人や紳士や、馬や牛やの脚下に踏みつけられながらも、寛かな、廣い、大きな心を以て、永劫に「沈黙」の歌を口ずさみつゝ微笑を漏らして生きて居ると云つたやうなところには、心行く許り奥床しい聖者の面影さへ偲ばるるではありませんか。基督が野の百合花を讚美されたのも此の境地からではありませんまいか。

私は或るとき小集會を終つてから、友人二三と四五の若い姉妹方と共に散歩した事がありました。秋の夕方でした。静かな黄昏の空に夕雲が最後の紫の沈黙を破つて深い淵に沈んで行くやうな感じのする夕でした。私共は狭いだらだら坂を北の方に下りながら、文學の話などを語つて行きました。私はふと路上の白い小石を一つ拾つて掌てのひらに載せました。而して二人の私と一緒に歩いて居つたTさんとIさんに向つて

「これは何でせう。」

と尋ねました。妹のTさんが

「小石でせう。」と云ひました。私は

「いいえ、これは私のバンですよ。」Tさんは吃驚して

「まあ、これがバンですつて！ 先生はおかしなことを云ふ方ネ。」私は

「私がこれを何のために拾つたかお分りですか。」姉のIさんが今度は笑ひながら

「多分私共を困まらせるためでせうよ。」と答へました。

私は秋の夕日に靜かに照らされて居るIさんの横顔を見ながら

「はいえ、これは私が食べるためです。」

TさんもIさんも目を見合せて、吃驚したやうに

「まあ先生は氣狂ネ。」私は

「はいえ、本統です。私はこれを目で食べるのです。」

と答へた事がありました。

さうです。あらゆるものは私共の食物です。目で食べるのもあり、耳で食べるのもあり、手で食べるのもあります。一切は感覺機能に對するフレッシュユな滋養に富んだ食物であります。

詩人ハイネは靜夜の星を仰ぎ見て、これは蒼天の黄金の銚だと云つた事がありますが。科學者たる天文學者から見れば斯うした見方は夢のやうな空想です。詩人の囁語として一笑に附し去ることとせう。併し眞の星の姿は天文學者の眼よりも却つて空想家と嘲けられた詩人の眼に映じて居るのではありますまいか。

我々の活きた現實の世界から活きた情意を除き去つたならば、最早活きた現實界はないのであります。本統の物それ自らの實在の姿は冷靜な科學や知識の眼に映ずる對象ではないのであります。さうした冷たい物の姿は死んだ姿であります。眞の物の姿は私共の情意が構成したものであります。此の活きた世界から情意を取り去つたならば、世界は空虚な洞窟か冷たい墓場に過ぎないのであります。生命の脈動がなくなるのです。具體的な眞の體驗に入つた世界は、あるがまゝに生きた血の流れて居る息をして居る世界です。星が金の銚として輝いて居る世界です。葉が沈黙の歌を歌つて居る世界です。小石が眼の食物として供へられてある世界です。ゲエテが嘗て青年時代に戀に疲れて重い胸を抱いて放浪の旅に上つたとき、棄てがたき思ひを斷つて自然の清らかな胸に抱かれて靜かにチューリツヒの湖上に船を浮べたとき、

Und frische Nahrung, neue Blut,

内容の下にて

光に養はれて

五二

Sang' ich aus freier Welt;

Wie ist Natur so hold und gut,

Die mich an Busen hält!

そこで私は自由な世界から

新鮮な滋養分と新らしい血とを吸つた。

自然は本統に優しく、情け深く

私を胸に抱きしめてくれる。

と歌つて居りますが、詩人の眼には自然から流れて出て居る新らしい血も見え、新鮮な滋養分が豊かに供へられて居るのも味はれたのです。此の點から見ると科學者や常識家の世界よりも藝術家や詩人と云つたものの方が眞の物を見たり味つたりして居るのではありますまいか。

私がまだ神戸に居つたときのことであります。私は友人の四五人と共に詩の會と

云つたやうなものを時々開いたことがありました。或る日私の宅でその集りをしたときに島地雷夢と云ふ方も見えしました。(此の方は有名な島地黙雷さんと云ふ方の息で、お父さんは佛教僧侶であつたに拘はらず、雷夢君は仙臺の二高に居られたとき、クリスチャンになられたのでした。) 詩の話や文學の評論などが互に話されて居りました。茶を飲みながら林檎をむきながら話がそれからそれへと續くのでした。私がそのときに雷夢君に

「君、林檎を一つむき給へ。」と先き程から黙つて人の話ばかり聞いて居る雷夢君に云つたのでした。

「ええ有り難う。」

「まあ、取り給へ。」

「え、實は先きから頂いて居りますので。」

「皆んな取つてくれたのです。まあ君一つ取り給へ。」

南窓の下にて

五三

「え、頂きました。」

「でもまだ君はむかぢやありませんか。」

「いえ、實は先きほどから林檎の色を頂戴して居ります。」

一同の視線は雷夢君に集りました。「色を頂戴か」「これは珍らしい」「こりや乙だ。」一同は笑ひの渦巻きに引込まれました。私は獨り黙つて雷夢君に心からの敬意を表さずには居られませんでした。

常識の世界から見ればどうしても狂氣としか思はれないところに、眞の物の深さが見出されるのです。私共はもう少し、否、もつと深く常識の世界を打ち破つて傳習の手から離れて、物その物の深みに見入らなくては本統に物そのものの姿を掴み上げることは能きないのです。私共の生活が兎もすればコンヴェンショナルな生活にのみ囚へられて、一步も足を新らし●世に踏み出すことが出来ないところから生活の混亂が、不安が、煩悶が生れて來るのです。新らしい感覺に生きる

ことは新らしい世界に活きることです。

感覺それ自らが意志體驗の生活の表はれです。モンテツツリーが新教育の方法として感覺解放を説いて居ることも意味が深いと思ひます。藝術の方面に於ては、かの詩人リルケが感覺の解放を歌つて居りますが、斯うした新らしい道が私共をして新らしい生活に入らしむる道ではないでせうか。舊世界は舊感覺の世界です。そこには何等の新らしみや鮮かさが見出されません。私共は新感覺の世界を私共の生活のなかに創造せねばなりません。新感覺の世界とは體驗の世界です。體驗の世界は眞の自由の世界です。生命が如實に流れて居る世界です。實生活に即しながら實生活を基礎附ける世界です。理知世界や意味の世界の本源に立つて居る世界です。具體的統一の世界です。自己統一と自己發展に生きて居る世界です。そこには物々躍動し、物我相忘じて居る境地があります。

私共は、到る所に、見る物に、聞くものに「隨處主となれば、立所皆眞なり」と云

つた古聖の味つた境地を、自分も味つてその境地に立つて見ると、「物皆眞に美はし」と云ふ深い世界を見出すことが出来るのです。

斯うした世界に立つて見れば、此の世界は、此の宇宙は私共の創造した世界です。私共の創造した宇宙です。「彼(基督)に萬物は造られたり」(コロサイ一ノ十六)と云ふ深い意味が眞實に讀めて來るのです。

世界は私共が創造した世界になつたときに、私共と血の通つて居る世界となるのです。純眞な生活がそこから始まるのです。斯うした萬有皆美の境地に立ち、芳醇な生命の杯を手にしたもののみが、眞の生活を生き得るのであります。

夢の問答

友。「君が白夢と云ふのはどういふ意味なんだ。一體佛語からでも出た言葉かネ。」

私。「佛敎のなかにそんな言葉があるかどうか僕は未だ調べた事もない。いつかも」

君が君は禪に親しんで居るから君の名は禪書からでも取つたのかと言はれた事があつたが、成る程僕は禪に興味を有つて居るがまだ禪のなかにこんな文字を見出したことはないネ。」

友。「それなら君自身で考へてつけた名かネ。」

私。「でもないんだ。」

友。「誰かからつけて貰つたと云ふのかネ。」

私。「と云ふのでもない。」

友。「それなら一體どうしてつけたと云ふのだ。」

私。「いや何も考へたと云ふのでもないし、貰つたと云ふのでもないがネ。さうだ僕が家を有つてから四年目の秋であつたらうかと思ふ。丁度生れた女の子が——F子と云ふのであつたが——三歳の年に毎晩のこと僕の母に抱かれて寢て居つたが、或る晩物にうなされたやうに泣き出した。母も吃驚してF子お前はどうして泣くのだ

と聞いて見たのだ。すると夢を見たと言ふぢやないか。」

友。「その夢がどうしたと言ふのだネ。」

私。「なんでも白い夢を見たと言ふのサ。それが一と晩や二た晩ばかりぢやないのだ一週間も續いて同じやうに白い夢を見ては泣くのだ。」

友。「子供が白い夢を見たと言ふのはそれは面白いネ。」

私。「僕も面白いと思つたサ。子供だから純なものだ夢まで白いんだなと思つて自分の子ながら感心した譯であつたが、或るとき一寸としたものを書いて見たときに試みに白夢と署名して見たのが初まりで、それから今日まで「白夢」を使用して來たやうなことで、何もさうたいして深い理由も何もないのサ。」

友。「白い夢つてどんな夢だらう。」

私。「そりや君、象徴的に意味附ければどんなにても意味附けることが能るではないか。先づ「白」と云へば理想ぢやないか。純一無雜の境地を色で云へば白と云ふより

外はあるまい。白夢と云ふと理想の純真境を夢みて生きて居る生活乃至は人とでも云ひ得るではないか。」

友。「併し君、白は告白の意味もあるんだから、夢を告白すると云つちやどうです。」私。「それも面白いですな。夢を告白する。さうだ。實際我々はいろ／＼な夢を見て居るからネ。其の夢を告白するもしい。兎に角人間には夢がなくちや駄目だ。夢見る國民でなくては國家の前途もないし、夢見る人でなくては其の人に理想なんかありやしないからネ。」

友。「實際其の通りだ。我邦の教育界には全然夢がないし、政治界にも宗教界にも乃至は文藝界にもまた實際に生きてる事業界なんかにも夢らしい夢なんか少しもないからネ。」

私。「誰やらが言つたやうに實際夢のない國民は滅ぶるネ。夢と云へば基督のやうな方は偉い大きな夢を見たものだ。此の地上に神の國を實現しやうとするなんか實に

夢の夢ぢやないか。僕はこんな偉大な夢を見た事も聞いたこともないネ。此の宴樂醉酒、淫慾、好色、争鬪、嫉妬に歩いて居る地上生活を正義と平和と愛とによれる神の國に成すと云ふことが到底不可能のことのやうにしか思はれないやうな夢を夢見てその可能性を少しも疑はずに、願くは聖國を臨ませ給へ、聖旨の天に成るごとく、地にも成させ給へと云ふ體驗の祈りに自ら生き給ふた許りてなく一切の人類を此の確信にまで高めて行つた力は實に驚くべきものではないか。僕はああした態度に觸れるときほど夢の確さの白熱化に胸搏れて釘づけにされるやうな緊張さを増してくる事はない。何と云ふ驚ろしい偉大な夢だらう。斯うした夢の所有者であつたればこそ人類の救世主としての自覺に立ち給ふたのだ。」

友。「君の云ふ通り基督は本統に夢見る人だ。夢見る人であつたればこそ彼の言葉が永遠の生命を有つて居るんだ。あの天地は廢せん、されど我が言葉は失せずと云つた權威！ こんな權威が他の何人にあつたらうか。僕は聖書を讀むたびに唯だ基督

に驚くのだ。」

私。「基督が死の國まで——十字架まで——敗北して猶ほ且つ我は世に勝てりと云つたあの凱歌は、彼の夢の勝利の讚美だと僕は思ふネ。」

友。「夢を見ない生活はひからびて居るネ。詩人や宗教家と云つたやうなものには要するに夢の國に空想を食つて生きて居る住人ぢやネ。」

私。「夢の國に空想を食つて居ると云ふと何んだか生きた生活とは没交渉のやうで古の世棄て人のやうな感もするが、その實は空想に生き夢に生きる人のみが眞の實際を生かす人だよ。實際のなかから空想がなくなり夢が消えた日には生活はからつぽになつて了ふのだからネ。」

友。「嘗て内村鑑三さんが、我に眞の詩人一人を與ふるならば十萬人を犠牲とするも敢て辭せずと云つたやうなことを言つたのを覺えて居るが本統にさうだネ。一人の豫言者的詩人、詩人的豫言者が生れると云ふことはその國の生命だからネ。」

私。「僕は伊太利國が亡びてもダンテ一人を生んだ伊太利を永遠に偉大な國として認めるに躊躇しない。物質のかたまりのやうにしか見えない米國に一人のホキットマンの生れたことによつて米國に對して無限の敬意を捧げる。」

友。「君のやうに詩人崇拜でも困るが、併し詩人を有たない國は本統につまらない國だネ。」

私。「僕は現代文明には詩がないから亡びると思ふ。新文明創造の力は唯だ「詩」によつてのみ生れる。夢見る人が大きな夢を見て、地上に夢の國を實現するところからのみ、新らしい眞の文明が生れるのだ。」

友。「僕もさう思ふネ。御互に詩の文明を生むために努力しやう。新らしい夢を見やう。夢を實現して行かう。」

假面劇のコーマス

新文藝の花が咲きかけてからは、フランの流れのほとりに生れ出でた若い芳醇な文藝でなければ、ロシヤの曠野に生ひ立つた薄暗い灰色の生活描寫でなくては文藝でないかの如く思はれて居る今頃、十七世紀の古い文藝の作品を紹介したところで時代錯誤のそしりを受くるは當然のことだ。

併し新らしいもの必ずしもいいものではなく、古いもの必ずしも悪いものでもない。殊に新文藝の新傾向が更に一轉してクラシカルな方面に向つて新らしい道を開いて來た今日に於て詩聖ミルトンの傑作コーマスを語るのも強ち時代おくれでもなからう。

典雅流暢なコーマスの假面劇は、ミルトン一代の最大傑作「失樂園」パラダイスロストを讀まない人はあつても、高等教養のあるものでコーマスを讀まないものは恥辱だと云はれて居る作である。

一たび外國に遊んだもので、あちらであんなに男女の交際が自由であるにも拘は

らず、處女の純潔を保つて居るに驚かないものはないが、これは家庭に於ける宗教教育の影響と云ふ事もありませうが、文藝の感化に待つところの大なる事は今更ら争ふことの能きない事實である。

ミルトンのコーマスは處女の純潔を主題として取扱つた劇である。勿論筋は極簡單です。劇そのものとしての價值から云へば大したものではない。併しそのうちに包まれた純潔な気分と云ひませうか、處女の永遠性の崇高さを歌つた——神のやうな潔さ高尚さ——點に於ては世界有数の作である。ミルトンの言葉をやる謹嚴な態度のなかに澄み渡つた天使の歌のやうな高い調子が到るところに水のやうに流れてる。

どんな惡魔の毒杯にも抵抗して死を賭して守つた處女性の美しさ、けだかさ、「美」と云ふべく餘りに高く、直ちに「崇高」そのものである。

ゲーテの久遠の女性美はミルトンのそれに比して見ると、其の偉大さに於て其の崇高さに於ては遙かに見劣りがするやうである。ただゲーテのそれは其の深遠さに於て其の包容さに於ては流石にミルトン以上の所があるやうだ。ただミルトンには他の何人に於ても見るを得ざる高潔さ光明さが輝いて居る。

「天の聖なる純潔」その儘の姿を人間生活のなかに見せた此の作は、人間の書いた詩のうちで最も高い貞操の讃歌である。ミルトンの謂ふ所の「清い夢」と「嚴かな幻」とが人間の精神界に於て、此の「地」に匍うて居る生活の中に「天」のやうに匂うて居る。

「靈魂の汚れざる宮殿なる肉の形骸」に「光」を與へて、次第々々に「靈」と化り行く力を最もよく味はせてくれるのが此の作の優れた點である。

經濟生活と文化生活

經濟生活を私共の文化生活から引き離して考へることは不可能である。經濟生活

と文化生活との間には生きた血の通うて居る關係がある。換言すれば經濟生活は人類の文化生活の一面的の生活に過ぎない。

文化生活と云ふのは普遍妥當の境から出立して個性の世界に生くる生活である。私共の生活現象に於て其の個性の價値を見て行くと云ふ行き方である。併しこの個性と云ふものを考へて見ると個性を單に個性として取扱ふことは出来ない。個性のあるところには必ず之に附隨して意義と云ふものが出て来る。此の意義の問題を中心として即ち價値問題を中心として經濟生活を見ると、經濟生活は人間價値生活の或る一面の内的生活を私共に語つて居るものである。

經濟生活其のもの個性とでも云ふべきもの其の本源に立つて眺むると云ふと經濟生活は必然的に先天的に一種の歴史生活であるべきだ。更に換言すれば經濟生活は人文科學 Kultur Wissenschaft の一現象として見るべきものである。「經濟」と云ふ一個の歴史的生活現象のうちには制約せられて居る。此の歴史生活の對象は與へ

られたる欲望を其の目標として居るのであるが、欲望そのものは一般文化價値の生活から見れば「生活」そのものの第一義的のものではない。單なる欲望のみが經濟文化生活の目標でありとすれば經濟生活は單なる心理學的現象の一部となつて了つて其の文化生活の意義を失つて了ふ。經濟的文化價値は眞の意味の生活即ち人格的生命を内容としたる生活あつて始めて其の意義を生じ來るのである。

即ち眞の生活は「持つ」と云ふことではなくして「在る」こと更に深く具體的内容的に言へば「活くる」ことである。歴史生活が人類の内部生活に生命を與へ、其の内部生活を向上せしめ、人間の内在價値を發揮せしむると云ふことをユニツクの意義として存在する以上、歴史生活の一面生活たる經濟生活が眞の意味に於て「活くる」ことを外にして何等の價値も意義もないことは明かである。

私共の生活を價値生活に結び附くると云ふ所に眞の文明がある。今日までの經濟生活が私共の根本生命の生活價値を向上せしむると云ふことよりは所有欲の満足を

充たすと云ふ所にあつたのは恐るべき人間生活の逆顛であつた。謂ふ所の價值顛倒であつた。私共は此の價值顛倒の生活から解放されなければならぬ。救はれなければならぬ。所有欲を人格欲に書き替へねばならぬ。謂ふ所の所有觀念が單なる貯藏觀念に支配されるのでなくして創造活動によつて所有即創造、創造即所有と化し來らねばならぬ。所有の内面的深化を試みねばならぬ。人格の光明としての意義に於てのみ所有が輝いて來ねばならぬ。所有を棄てるのではない、所有を人格化するのである。茲に「持つ」ことが「在る」こととなり、更に「在る」ことが「活きる」こととなつて、價值生活たる「ゾルレン」のなかに「ザイシ」が活きて來る。私が「散文の文明より詩の文明へ」と云ふ生き方を主張するのは要するに斯うした價值顛倒の生活から目覺めて文化價值の生活に生きねばならぬと云ふことである。經濟生活のなかに詩のリズムを聽く人間生活に活きねばならぬ。經濟現象が嘲朗たる音樂と化つて響いて來ねばならぬ。斯うした内面生活に生き、純真な生活の價值を人格的に享有す

ると云ふ所にのみ謂ふ所の新らしい文明が來なくてはならぬ。換言すれば今や生活は經濟から宗教へと云ふ橋を渡りつゝある。然り人間生活は永遠に何等かの意味に於て橋を渡りつゝあるのだ。私共は今斯うした新らしい橋を渡らねばならぬ。ニイチエが「人間は動物から超人へ渡る橋である」と云つたが、私共は「現代は物より人に渡る橋である」と思ふ。

寸語 寸韻

- ◇私には與へる生活よりも受くる生活がより深い生活である。深い受くる生活のない人は何物も與へ得ないではなからうか。
- ◇表現の限度が即ち直觀の限度であると云ふクロオチエの藝術觀は、與へ得る深さが受け得る深さであると云ふことを語つて居る。
- ◇受くるとは内部に深く目覺めた魂の純真な態度で對象自らの深みより流れ來る生

命のリズムに感應する意識状態である。

◇内に深く目覚めたもののみが外に深く透入する眼を有つて居る。

◇内に目覚むるとは純真な自己の姿が何等の蔽ひなく赤裸となつて本質を發揮した境地である。斯うした所にのみ隠くされた光が輝いて来る。

◇自覺の境地から自己の生活を創造して行く所に神の生活が開始する。

◇神の生活は與へる生活である。人の生活は受くる生活である。受くる生活が與へる生活と化つたときに生活の眞意義が現はれ宗教が芽生ひ人が神となる。神が人のなかに自己を啓示するのである。

◇ここに「神、人の中に住み、人、神の民となり」一切は圓融無碍の「一」に生くるのである。「一」に生くる生活が即ち宗教である。

◇「香と色と音とは互に相語つて居る」とボードレーは歌つて居る。鋭い神経と深い洞察とを所有して居る詩人には通常人の錯覺が其の儘に正覺である。彼に取つて

は音響や色彩や香氣は無限の彼方に靈を導く象徴ではなくして「靈そのもの」であり「無限そのもの」である。

◇「明るみと暗とのかくも織り交ざる薄暗き詩より外に慕はしきはなし」とヴェルレーヌは歌つて一切萬有のヴェールの後ろに美はしい瞳を見出した。暗と色合ひの中に爽かな音樂を聞いた。夢を夢に結ぶ世界をそこに見た。

◇「淨邦縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしむ」と親鸞は説いて居る。本統に光に包まれた闇の色は美はしい。神は反逆者の中に眞理を認めて居る。「神バロ（横暴な帝王）に我れ汝を立つるは特に汝をして我が權能を顯はさんためなりと示し給へり」とパウロは語つて居る。惡のなかに輝く神の光。闇の中に輝く美の光。矛盾のなかに、反逆のなかに永遠のものが生きて居る。

◇「動を止めて止に歸すれば止更に愈々動す」と古聖は歌つて居るが靜にのみ落在する哲學や宗教が靜に死し、動にのみ執着する宗教や哲學が動に死するは當然だ、眞理

の當體は靜のなかにもあらず、動のなかにもあらず。單なる相對の動、單なる相對の靜は生きて居ない。動と靜とは渾一圓融の状態に於てのみ其の生命を泉んで居る。

◇私には「ある」と云ふことが一切である。考へることも働くことも爲すことも凡てが「ある」ことの道行に過ぎない。否、考へることも「ある」ことである、働くことも「ある」こと、爲すことも「ある」ことである。

◇「ある」とは自己全體である。他は凡て部分である。

◇體驗生活に取つては部分が部分としての絶對相を現はしたときに部分は其の儘に全體である。部分が對全體の部分であり全體である間は謂ふ所の全體は眞の全體ではない。絶對純一に於ける全體は部分を離れた全體であり、體驗状態に於ける部分は部分を離れた全體である。此の場合には「ある」ことのみが生きて居る。

◇「ある」のうちには形式が本質化され本質が形式化されて居る。一體形式の本質の

と云ふ二元對立の意味に於ての形式もなければ本質もないのだ。「ある」生活のうちには本質と形式とが渾然として一つに溶け合つて居る。

◇一つに溶け合つた生活は藝術であり宗教であり戀愛である。

◇藝術と宗教と戀愛とが一つになつた生活が眞の意味の生活である。

◇「美」は一切のものを不死に化する力を有つて居る。

◇魂と魂とは美の世界に於てのみ語り得る。

◇違つた道を歩むのは同じ道に出たいためである。

◇途上哲學——さうだ人間が一番自由な純眞な生活をなし得る時はただ途上に於てのみである。

◇日常生活には一切の歴史家の知らざる詩趣が満ちて居る。

◇偉大な詩は苦痛と悲哀との中に包まれた美の姿である。

- ◇夕暮の空には読み盡くし得ない聖句が書かれてある。
- ◇人間は自分の姿を見ずして死んで行くのだ。
- ◇「現はれ」たものの中には「現はれ以前」の世界をのぞく窓がある。
- ◇掌のなかの小石の中には戀人のハートより漏れ出づる歌よりも美はしい柔かい歌が秘められて居る。

- ◇友とは人間の美はしい所の外見えなない間柄である。
- ◇戀とは自分の好きなことの外見えなない間柄である。
- ◇情とは知よりも深い洞察力を有つた眼である。
- ◇意とは部分の中に全體が生きやうとする力である。
- ◇想像とは見えざる世界を見える世界に築かうとする建築師である。
- ◇女とは男の胸に自分の庭園を造らうとして居る園丁である。

- ◇哲學者とは知識を音楽と聞く夢見る人である。
- ◇詩人とは光の翼に乗り廻る飛行家である。
- ◇音楽家とは人間のハートを柔かい強い力で取り巻く毒蛇である。
- ◇宗教家とは泥土のなかに天使を描いて居る美術家である。
- ◇男とは女の胸に自分の好きな樹木を植えやうとする殖林家である。
- ◇人間とは獸から神に行く一線である。
- ◇花とは「次は」と指して居るステーションである。
- ◇八月の眞晝の静かに晴れた空には星が輝いて見えて居る。
- ◇青葉の色の中には「火」がダンスをして居る。それが私の魂の糧である。
- ◇空の湖！ 私はいつも私の魂の別荘をあつ湖のほとりの樹蔭に建てやうとしてゐる。

◇空^{フアンタジー}想！ そこには魂の、然り疲れた魂の息ひ場が備へられてある。そこには涼しい樹蔭が現実のさすらひ人の息ひを誘つて居る。さすらひ人は空想の母胎から新しい力に充たされた現実の愛兒を産むのだ。

◇空想に生き得ない人々は常に飢餓に泣いて居る最も貧しい人々である。

◇空想にのみ生きる人々は墓場に住んで居る貴族である。

◇私共の生活には「幕一重彼方」と云つた所にのみ眞の人生がある。幕があると云ふのは「無限」を背景として居るのである。幕の彼方に永への音楽が流れて居る。

◇人生には永遠に大詰の幕がない。幕の彼方に常に「幕一重」がある。

◇「肉の幕！」神の造つた藝術でこれほど靈味の滴つて居る勞作はない。

◇「意識の幕！」神の與へた謎で是れほど解き難い謎はない。

◇戀愛とは意識の幕の彼方の音楽を肉の幕の薄絹を透ふして聞く魂の憧れの態度である。

◇血！ 一切は血によつてのみ解決の鍵を與へられる。血は直ちに神そのものだ。

◇人の罪を赦す心の働きには人を赦してやると云ふやうな氣分が少しでも働くべきではない。不埒な事をしたが赦してやるぞと云ふ心持ちは既に人を審いて居る。

◇赦させて頂くと云つたやうな心持。極柔かい碎けた魂の所有者にのみ與へられた精神状態にのみ人を赦し得る濡れた心が光つて居るではないか。

◇罪に泣いた事のない人には人の罪は赦し得ない。罪人のみ罪人を赦し得るのだ。

◇詩のやうな若草の匂ふやうな純な心の所有者のみが赦しの賜を恵まれて居るではなからうか。

◇人をとがめだてする心の中には人を審く前に既に自分の心を暗に葬つて居るのである。

◇自分の罪に泣けば泣くほど人の裏の神が尊く拜まれて来る。

◇新らしい生活には互に赦し合ふ、互に抱き合ふ本統の濡れた光が輝いて居る。
◇私は神の國とは互に濡れた心と心との抱き合ひであらうと思ふ。

◇碎けた魂の所有者にのみ神の恵みの露は豊かに滴つて来る。柔かいハートのなか
にのみ純な光が差し込んで来る。

◇罪の自覺のない魂はまだ本統の碎けた魂の所有者ではない。ダビデ王がウリヤの
妻を戀して不義の罪をかさねた結果神の前に告白した彼の聲は「我が罪は恒にわが
前にあり」と云ふのであつた。彼はそこに深い苦しい自覺に胸をえぐられた。「視よ
我邪曲の中に生まれ罪にありて我が母我を妬みたりき」と云ふ懺悔は彼の眞劍さを
語つて居る。

◇「神の求め給ふ供物は碎けたる魂なり」。さうだ「碎けたる魂」の外に神の喜ぶもの
はない。「神よ汝は碎けたる悔ひし心を輕しめ給ふまじ」何と云ふ美はしい心の音だ
らう。私共は斯うした美はし魂の所有者に無限の敬意を表はさずに居られない。
◇一度も罪の自覺に泣いたことのない人は到底宗教の國に行き得ない。「罪人は神に
近し」と云はれたワイルドの告白は今尙ほ私の胸を支配して居る。

◇カール・ヨエルの『魂と世界』を手にした。最近私の書齋に光を添へた世界的傑作
の一つだ。私の魂は此の書の中に吸ひ込まれて行くのを感じずには居られない。先
づ「近代的幻像としての魂」を説き、ラインの流のほとりで小さい自分は魂の本質に
就て考へてゐると云つたやうな書きぶり、何と云ふ匂ひのするやうな書物だらう。
詩と音楽と宗教と哲學とが一つに溶けて繪畫となつたやうな書物。

◇私は嘗てニイチエの『ツアラツストラ』の中に流れて居る詩と哲學とが音楽に溶け
て居るやうな精神に觸れた。『魂と世界』とは『第二のツアラツストラ』ではなからう
か。而してヨエルは第二のニイチエではなからうか。

◇超人を生む新らしい時代が来た。彼は「最高観としての思惟」を説き、更に「世世観より世界支配へ」を説いて居る。彼に取つては「一元論と観念論」とは「灰色の室の灰色の無」である。彼は「生命の原渾一」を説き「絶対」を説き「創造力」を説き「不滅」を説き、最後に「世界審判」を説いて居る。彼は新らしい超人哲學の主張者である。

◇日曜の夕暮散歩した。手には一冊のルツテル譯の聖書がある。「我が主のあらん限り我れ主を讃げんと欲す。」讀み乍ら考へながら土居下の坂を下る。さうだ宗教は「讚美の欲求だ」と云ふ言葉が私の唇を破つた。

◇歌はずに居られない、神を讃げずに居られない強い深い深い叫びが宗教だ。

◇私は小流れのほとりにしやがんで手に一握の砂を掴んで流れに其の儘手を浸した。私は今「宇宙」を掴んで居るのだと思つて掌を開いて見た。清い流れの水は私の掌

から砂を奪つて了つた。

◇私は今自分の手から「宇宙」を取られて了つても何等の苦痛も感じない。そこには所有の欲求がないからだ。私はそこに「讚美の欲求」に目覺まされた。私の掌の砂は流れの水に奪はれたが私の手に觸れた印象を彼等は永遠に其の記憶の中に残して居るに相違ない。

◇私と砂とは永遠に新らしい關係に生きた。私は私の新らしい血が私の手から彼等の胸に傳つたのを感じずには居られない。

◇「血」によつて結ばれた關係のみが生きた宗教だ。

◇私は此の頃古典に浸つて居る。古典は私の邸宅である。古典はローマンチックな詩の世界だ。詩の解らない者には到底古典は解らない。

◇古典の光は闇のなかの光だ。奥深い匂ひのする光だ。私から見ると古典ほど永遠

に鮮かな光を有つて居るものはない。

◇神は古典のなかにのみ自己の聖い御姿を隠して居るのではあるまいか。古典の幽林に分け入つた者にのみ惠まるる「太古の音楽」の響き、人跡未踏の一境より湧き来る其の泉。そこには太陽が曙の歌を歌つて居る。夕星が羅のカーテンを捲き上げて居る。

◇私の魂は蝕ばんだページの中に喰ひ込んで行く。聖者と握手する、哲人と語る、豫言者と言葉を交す。「生命の書」に其の名を録されたもの許りが私の周囲を歌ひながら取巻く。

◇プラトーン、イザヤ、老子、孔子、莊子、釋迦、馬鳴、龍樹、法藏、基督、ヨハネ、パウロ、プロチナス、フランシス、オリゲナス、エリユーゲナ、エツクハルト道元、法然、親鸞、これ等の古聖は凡て私の古典に於ける友人である同行の順禮者である。

◇むかし宗照と云ふ僧が木庵と云ふ老師の許に至つて、「私は至つて愚かな者であります、どうか箇の見所と云ふべき本來の所を御示し下さい」と云つた。木庵は面前の香爐を指して「見えるがどうぢや。」照「見えます。」師「どう見える。」照「解りません。」師「それでも見ると云ふのか。」そこで宗照は初めに「見えます」と云つたのが非常に耻かしくなつて背中から冷汗が流れた。それから門を閉ぢて一生懸命に體驗の生活を辿つて遂に本來の面目を把住したと云ふ事だ。

◇「見る。」此の「見」の一字に宗教の極致は盡きて居るではないか。私共は未だ何物をも見得ないではないか。單なる物の外形に迷はされて物其の物の中心生命に透徹し得ない。物の中心にのみ私共の體驗の境地があるのだ。

◇物我相忘じ主客相渾融して物々光明、事々生命と化つて流れて來るときにのみ初めて「生活」らしき生活を掴み得るのではないか。

◇體驗の境地なくしては眞の生活はない。眞の生活なくしては眞の人生がない。是の意味に於て宗教のない生活は意味も何値もない生活だ。

◇天に生くるものにして始めてよく地に生くることが出来る。地に生くると泥に生くるとは全く違ふ。單なる泥に生くる者のみ多くして眞に深く地に生き得る者少なきは高く天に生きるものの尠なきに由る。

◇夜の神祕は「無限」そのものを詩として現はして居る。「夜の書」を繕くもののみ與へらるる神の恵みは見えざる手によつて私共に手渡しされて居る。

◇夜は私共の魂の旅立ちする時である。晝は私共の手、建築をして居る時である。

◇女は男の前置詞である。男と云ふ名詞は女と云ふ前置詞に由つてのみ規定附けられる。

◇火は私に取つては神の言葉である。

◇石ほど私に取つて永遠の祕密を語つてくれる雄辨家はない。

◇煙突の煙は都市が捧ぐる現代生活の祈りである。

◇子供は生れながらの詩人である。彼は極めて少ない言葉に彼の魂の火を點ずる、言々句々純な詩となり得るのはそれが爲めである。

◇燃ゆる火と若草との間には血が通つて居る。若草の葉には熱い火が流れて居る。

◇闇は神の胸である。どんな悪人でも闇の胸には其の隠れ家を見出す。

◇小石のなかには劫初の生命がダンスをしてゐる。

◇色彩は線の舞踏であり、線は色彩の祈禱である。

◇「實在は意志の闘争である」。私は思ふ、「意志は時間の俳優である」と。

◇「如來擧身の相は世間の情に順ぜんが爲めなり」。私は思ふ、「純なる人間生活は神の藝術を創作せんが爲めなり」と。

◇「美」は土より生れ、土は火より生る。火は神の懷に抱かれた戀人である。
◇私の思索史は私の眼が生んでくれた。

◇魂と魂とが抱擁した世界では——その瞬間は——肉は其の儘靈である。

◇宗教とは夏の黎明の空のやうに「愛の黎明」が明け初めて來た人間生活だ。

◇深い呼吸をして居る思索生活には形而上學的な氣分が詩のやうに匂ふて居る。

◇天空の無邊際の道なき道を分けて飛ぶ夕鳥の姿は「宗教」の象徴詩だ。

◇木の葉が夕陽を浴びて靜に慄いて居るそこには永遠の「時」の足音が私共の魂に歌を齎らして來る。

◇音は圓い匂ひである。匂ひは聞えない色だ。

◇太陽の眼から流れた涙が夕の小草の上に輝いて居る。太陽と小草とは互に戀人である。

◇蛇の首から流れて居る線は美の泉である。

◇黒土の胸に秘められた音樂のみが失戀者の最も深い悩みを和ぐる力を有つて居る。

◇森の落葉には夕星の黄金の文字が秘かに織り込まれて居る。

◇神とは花の眼であり、火の手であり、星の眉である。

◇書物は讀む場所に依つて其の意味が違ふ。人は讀む書物によつて其の風采を異にする。

◇人が人である間は「人」ではない。人は人を離れて始めて「人」たる價値を見出す。

◇散文では人は決して懺悔しない。詩の中に於てのみ人は眞の自分を語る。

◇眞の人間を語つて居る書物は一切詩である。

◇一書に深く徹する人のみが眞の讀書家である。

- ◇懺悔とは過去に於ける未來性を語ることである。
- ◇罪の赦しとは悪魔の胸に神が宿つたことである。
- ◇聖者の胸には何人も知り得ない罪の悩みが潜んで居る。
- ◇神は人間に最も不可思議な天に昇る梯子を與へてくれた。罪人の心——それは常に天に向つて居る。
- ◇夏の川の岸には曙の星が置き忘れた戀文が残つて居る——それは涙に濡れた若草の葉だ。

◇自然の最も不思議な祕密は少女のハートに萌え出づる「歌なき歌」である。

詩 禪 一味

禪の深い味ひは凡て詩である。詩はその深い所に至ると禪に通ずる。詩と禪とは本來一味である。

無邊風月眼中眼。

柳暗花明十萬戶。

不盡乾坤燈外燈。

敲門處處有三人響。

ここには禪の極致を表現するに詩の外に言葉なく、詩の極致が直ちに禪に化つて居ることを最もよく語つて居る。寒山の此の詩が碧巖百則の風光を歌ひ其の面目を頌して居ると云はれて居るが、單に碧巖頌古百則のみではあるまい。一切の宇宙一切の人生一切の生活一切の境界は此の一詩の中に歌ひ盡くして居るではないが。靈照遺すところなく、三世を貫き十方に通じて、暗にあつても暗ならず、明に在つても明ならざる、相を離れ體を絶したる境、あるが儘の實在の眞風光は眼中の眼と照つて私共の前に現前しつゝあるではないか。古を輝らし今を輝らし有を絶し無を空じたる不斷の一燈は、煌々として日月を超へ沙界に徧して一切を照らして居るではないか。燈外の一燈。玄に入り微に入り妙に入り祕に入つて鮮かに其の姿を露はして居る。

此の現成！ 此の公案！ 森羅萬象、歴々分明、自位に住して其の家風を顯はし其の地に在つて其の等を濫さず、把住の面目、放行の活作と共に其の自家本分の生命を躍動せしめて居る。「門を敲けば處々人の響ふるにあり。」然り宇宙到る所、「人」の聲が聞ゆ。水の流れるところ、火の燃ゆるところ、星の匂ふところ、日の照るところ、門を敲けばそこに「人」の聲がする。然り宇宙は「人」によつて充されて居る。否、宇宙は「人」によつて創られたのだ。人のないところ宇宙はない。「江月照らし松風吹く、永夜の清宵何の所爲ぞ」と永嘉は歌つて居るが、「江月照らす」ところそこに人あり、「松風吹く」ところそこに人あり、「永夜の清宵」もこれまた人の所爲ではないか。

佛蘭西の詩人サマン其の詩「水上奏樂」*Music on the Waters*の末節に於て歌つて居る。英譯によれば

O list what the symphony saith,

Nothing is sweet ap the death,

Of lip to lip in the breath,

Of music vaguely sighing.

此の節を堀口大學氏は次のやうに譯して居る。

樂の響に聞入れよ

微けき樂の音のうちに

寄り合ふ唇のわななき許り

うれしきものの世にありや。

私は思ふ單に世に「うれしきもの」は（英譯によれば、*Sweet*「甘美」とある）戀人同志の「唇と唇」（*lip to lip*）許りではあるまい。實在と我との接吻許りうれしきもの、甘美なるものが世にあらう。古人が「法喜禪悅」を妻となすと味はれたもの、

そこには謂ふ所の樂のそれよりも更に高き戀があるではないか。我が唇が實在の唇と相觸れ相接した時の歡喜無上の恍惚境！そこにのみ詩禪一味の融合境があるではなからうか。宗教は私の戀である。古人が「一心欲^ニ見^レ佛^ト不^ニ自^レ惜^ニ身命^ト」と歌つた境、西詩人が「Jesus, Lover of my Soul」イエスは我が魂の戀人」と歌つて居るのも同じ辿りである。詩に生くるは喜びに生くるのである。喜びの最も深きところ——然り喜びのなき喜び——そこに禪の味ひが滴つて居るではないか。

デモクラシーの詩人ホキットマンが其の『草の葉』のなかに於て其の「大道のうた」
Song of the Open Road の第一節に於て

Afoot and light-hearted I take to the open road,
Healthy, free, the world before me,
The long brown path before me leading wherever I choose.

徒歩で心も輕快に私は大道を行く。

健康で自由で、世界は私の前に

長い鳶色の一路は私の前に

私が選ぶ何處へなりとも私を導く。

何と云ふ自由濶達な、無碍な心境だらう。斯うした所にのみ「今後私は幸運なんか求めない。私は私自身が幸運である」と云ふ絶對満足の境地が開けて來るのだ。私はここにも詩禪一味の境地があると思ふ。生死岸頭に於て大自在を得ると云ふ禪の境地は、一切を大道に於ける斯うした體驗地に於て味つて居るのである。基督が明白爐の火に投げ入れられて焼かるる野の百合花が、今日は野に在りて自己満足の喜びを以て咲き匂ふて居るのを見て、「野の百合花は如何にして生長するかを思へ、……我汝等に告げんソロモンの榮華の極みの時だに其の装ひ此の花の一つに加かさのき」と讚美されたのは正しくも斯うした詩禪一味の境地を指して居るのである。

私は『論語』を繕いて

飯^ヒニ^ニ疏^ヲ食^シ、飲^ミレ^ニ水^ヲ曲^テ、肱^ヲ而^テ枕^ス之^ヲ、樂^亦在^リ其^中。

と云つて簡易單純な生活に甘んじた孔夫子の生活體驗の心境を味ひ更に顔回に對して

賢^{ナル}哉^ト回^ヤ也、一^ノ簞^ノ食[、]一^ノ瓢^ノ飲[、]在^ニ陋^巷、人^不堪^ヘ其^憂、回^也不^レ改^ニ其^樂、賢^{ナル}哉^ト回^ヤ也。

と云ふ聖貧禮讚の言葉を出だされたのを見ても。彼の詩禪一味の生活がここにあつたのではないかと思ふ。禪眼と以て『聖書』を読み禪眼を以て『論語』を繕けば、書中到處ところ詩味に満ち禪味に溢れて居るに驚かずには居られない。若しそれ一等地に於て根源を識破し來れば「物々全眞、頭々玄極」。苦瓜は根に連つた儘にして苦く甜瓜は蒂に徹した儘にして甜いのである。一切の法は法々法位に住して其の本分を語つて居る。本來一切の法は永遠の相にして言葉を以て宣すべきものではない。しか

も「言や端的の道」であり、「語や端的の語」である。此の意味に於ては言葉を以て宣すべからざる禪の境地、詩の聖田も如何なる麤言如何なる煥語を以てすと雖も之を宣じ得られないと云ふことはない。しかも宗教の奥旨は文字の上に言葉の上にあるのではない。文字や言葉は單なる一心の影である響きに過ぎない。心そのもの、體驗そのものは語るに言葉なく解くに文字がない。「終日行じて未だ嘗に行ぜず、終日説いて未だ嘗て説かず。」純粹經驗の體驗境は體驗自らが體驗するの外に體驗の道がない。詩といひ禪と云ふ。これ又空しき文字に過ぎない。詩禪一味、本來一味にあらず、一味と云ふべきものもない。詩禪と云ふべきものもない。詩禪一味と云ふべきものないところのみ、本來の詩禪一味の境地が圓かに現前して居るではないか。

第二篇 生活の種々相

(一) 愛の生活

有島武郎氏は「惜みなく愛は奪ふ」と云つたが、これは愛の一面性のみを見ただけのことであつて、未だ愛の全面性に徹し得ない見方である。私共は「小鳥を生く」ことが私共の愛の生活であると共に「我を小鳥に與ふる」ことも出来るのである。奪ふ愛は未だ小さい「個」の世界にのみ生くる愛であつて全然自己を對象の中に投げる愛ではない。全然自己を對象の中に投げ自己のなき自己に生き得るとき、そのとき始めて「全」の自己に生き得るのではあるまいか。「個」の色彩附けられた生活のなかに生くる間は、未だ眞の生活ではあるまい。そこには執着の世界、主觀の世界に佇徊して居る色合が残つて居るのではあるまいか。私共の生活は全く自己を超

越し切つた時に於てのみ、直ちに自己自身に生き得るのではあるまいか。古人が自我放擲の境と云つた所のもの乃至は大死一番底の境と云つたやうな所は斯うした心境を云ふのではあるまいか。基督が「我に従はんと欲する者は己を棄て、其の十字架を負ふて我に來れ」と云ふ所の「己を棄てる」生活は單なる「奪ふ」生活ではあり得ないと思ふ。西田博士は「我々が愛によつて對象其の物の根底に徹するとき、全然對象界を打ち克ち、盲目的自己を滅することができるのである」と云つて居る。對象其の物の根底に徹するのはやがて單なる自己即ち盲目的自己を放擲するのである。自己放擲の中に眞理に對する愛が目覺めて來る。斯くして全然對象界を打ち克つたときにのみ、換言すれば「物其の物」の中に生き切つたときにのみ愛の生活を生くるのではあるまいか。「理性の火は實在の根底を照らし盡くすことができない」と同じやうに「奪ふ」愛は實在の根底を掴み盡くすことができない。悲む我と喜ぶ我との根底に無限の悲み無限の喜びが私共の生活の中に生きなくてはならない。「喜ぶ

ものと共に喜び、悲む者と共に悲む」のが愛の本質である。私は思ふ、斯うした境地を體驗する生活は奪ふ生活ではなくして寧ろ「死する」生活であり、「棄てる」生活でなくてはならぬ。死すると云ひ棄てると云ふ、言葉は消極的表現の態度であるが此の消極的に見ゆる否定道の一路よりして真に徹底した肯定生活が生れて來るのではあまいか。限りなき自我の神祕はここからして始めて其の神々しさを發揮し内現し得るのである。

(二) 悲みに生くる生活

私は自分の悲みを人に訴へる氣はない。併し私の胸には斷へず悲みが内深く秘められて居る。私は私の生に執着すればする程悲みを味はずには居られない。生の體驗者は悲みの體驗者であるやうにも思はれる。

何故に人生に悲みがあるのであらうか。私には解らない。唯だ私は深い悲みが生んでくれる深い喜びを味つて居る。悲みの中から輝いて來る光を仰ぎ見る時に、眞に人生の深みに溶したのではあるまいかと云ふ感じもする。

「眞理を自分のものにするだけでは充分でない。眞理が私共を自分の物にせねば駄目である」とメテリックは云つて居る。私は悲みを自分のものにするだけでは充分でない。「悲みが私たちを自分の物にせねば駄目である」と云ひたい。悲み其の物のなかに融けて浸つて其の中から伸び上つたときのみ私共の魂は本統に輝いた純真な姿と化り得るのではあるまいか。ダンテが『神曲』中の『淨罪界』^{プルガトリア}で描いた生活はやがて斯うした人生の眞の姿を語つて居るのではあるまいか。

「罪人は最も神に近い」と云ふのは罪を犯したその事が神に近いのではない。罪に對する深い悲みの自覺が最も神に近いのである。ワイルドやヴェルレーヌが神に近づき得たのは彼等がその犯した罪に對して深い懺悔の心境に入つた時から始まつて居る。

マグダラのマリヤが「再び基督の眼より流れ出でし愛の優しい光に觸れた一刹那彼女が前半生の闇の生活から離れて新らしい光の生活に移り得たのは、彼女の裏に輝き出た「悲みの光」が彼女の「ハート」を「しつくり」と濡したからではなからうか。基督の眼とマリヤのそれとが觸れ合つた瞬間、そこには「神」が「悲みの姿」として現はれて、運命付けられた彼女の生活を久遠の闇から久遠の光の彼方へ導いたのではなからうか。

悲みの生活は悲みそのことが尊いのではない。罪に「くづ」れ泣く其の悲みの涙のなかに輝く人格の光が——然り罪人の胸の闇に包まれた光が——尊いのである。そこには解放された「人」が輝いて居る。悲みの人へのみ許された深い寂しみの喜びは——充たされた寂しきは——全人格の完成を基礎付けて居る。斯うした喜びを體し得た私共の生活の中には、悲みを味ひ得ざるものの達し得ざる人生の深みが味ひ得らるるのではなからうか。「悲む者は幸ひなり」と云ふ聖者の經驗した生活の中には天よりの慰めが春の日の太陽のやうに和かに照つて居る。詩人が謂ふ所の「輝きと恐れとの遙な遠い國」から來る恵みの響きを感じ得るものは、微笑しつゝ、悲みの門を「く」いて居る者であらねばならぬ。

(三) 私の讀書生活

阿部次郎氏が「自己の力を最高の度まで發揮するには、他人の體驗を通じて體驗を味ひ、他人の思索によつて思想を豊富にして、一人の生涯に千萬人の生涯を攝取するやうに心掛けねばならぬ」と云つて人生に於ける讀書の重大なる意義を高調して居る。私も自分の一生涯に千萬人乃至一切人の生涯を攝取し私の内面生活を豊かにし、私の體驗生活を培かひたいと願つて居る。私の一生の熱望は人間の書いた傑作と云ふ傑作を悉く讀破することである。併しさうした願は到底實現されない不可能事である。私は「せめてもの心やり」に私の最も私淑して居る詩人、哲人、聖者の思

想と其の體驗生活とに觸れて、彼等の心靈の泉から汲んで私の心田を潤ふし私の生活に豊かにしたいのが私の精一ぱいの願ひである。古酒飲むべし古書讀むべしと云ひますが實際「時」のランビキにかけたものは何んと云つても深くて純粹で尊い。其の意味に於て私は世界の最傑作と云はれる少數の良書のみを選んで自分の魂の糧としたい。また從來さうした態度で永い讀書生活を續けて來た。少數の良書を精しく讀み、熱心に讀み、深く讀み、讀めば讀むほど深くなり豊かになり尊くなるのを覺える。さうなると著者と自分とは融け合つて著者が自分になり自分が著者に化つて來る。陸象山が「我、六經を著し六經我を註す」と云つた境地が自分にも味はれる。書物が自分の血と化するのだ。ニイチエは「一切の書かれた物の中私は唯だ血を以て書かれたもののみを愛する」Von allem Geschriebenen liebe ich nur das, was einer mit Blute schreibt と云つたが實際血を以て書かれたものは一字一句が其の儘血に化る。斯うした血で書かれたものは例へそれが少數のものであつても自分の一生涯

を通じて讀んでも讀み盡くし得ないやうな感じもする。

羅馬人の諺に「一書の人を恐るべし」と云ふのががあるが、本統に聖者なり哲人なり詩人なりの生命の漲つて居る血の湧いて居る生きた書物に徹底的に通じたものは眞に驚くべき力を有つて居る。併し斯うした徹底境に入ることは容易なことではない。十回廿回幾十回か幾百回か讀んで讀み盡さなくてはならぬ。「讀書百遍義自ら通ず」と云ひますが心讀體讀血讀色讀して其の深い底に徹するとそこから滾々として泉が湧いて來る。書を讀む以上は斯うした讀み方をせねば實はウソである。私は斯うした考へから第二流以下の書物は極あつさり讀むことにし第一流の書物に對してのみ全精力と全時間と全心血とを捧げて集中して居る。集中して來た。また將來も集中して行きたいと思ふ。例へ其の中の二三なりとも深く透入して其の中心生命まで掴みたいと思ふ。世界の最良書の一に通ずるは、全自然の深さと全人生の深さとに徹する所以の道だ。

私は幼少の時から漢學塾で教育を受けた結果であらう今に『中庸』や『易經』等の古典に對して限りなき趣味を有つて居る。此等の古典は既に過去三十餘年間私の親んで來たものであるが今尙ほ私に取つては新らしい泉の流れて居ることを感ぜずには居られない。私に取つてはこれ等の古典は聖人の單なる道徳的な教訓書ではなくて廣い意味の詩集である。汲めども盡きない詩の泉がそこから流れて來る。其の後基督教を信じてから『聖書』は私の生命の書となつた。人間の書いたもののうちで一番崇高森嚴な書物だ。神と人との融合妙會の音樂が太古の深い森から響いて來る。確に「聖書は神の書だ。生命の書だ」と云ふ體驗に裏書されて居る書物だ。寧ろ書物と云ふよりは直ちに「神の血液」そのものだと思つて居る方が適當である。「聖書は詩に歸する」と云ふ人もあるが私に取つては「聖書は神の言語化したものだ」。私は『聖書』の文字的無謬説を信ずるものではない。誤りもあらう。くだらぬ所もあらう。併しそれが爲めに「神の書」たる價值は少しも失はれない。私の過去三十有餘年間

の讀書生活は、私に取つては『聖書』は「人間第一の書」だと云ふことを教へてくれた。私は愈々入つて愈々其の深きに驚き其の高きに驚いて居る。

エマーソンの論文集や、ワーズワースの詩集が私の愛讀書の一に數へられるやうになつたのは、私がA神學校の寄宿舎生活時代からのことだ。既に二十七八年の過去に屬する。私はエマーソンとワーズワースには随分浸つたものだ。武藏野の秋の郊外に獨り落葉の雨を踏んで散歩した折にも私の手からは此の論文集と此の詩集とは離れなかつた。宮城野の夕涼しき廣瀬川のほとり若葉の蔭に友と共に人生の悲哀を語つた時にも私の懷には此の二つが秘められて居つた。

『碧巖錄』や『正法眼藏』が私の愛讀書となつたのは森鷗外先生と共に玄海のほとりのK市で共に東禪寺にB老師の提唱を聞いて禪に耽つた時からである。もう既に二十有餘年の昔である。併も今に尙ほ私に取つては新らしい戀人である。斯うした古典は幾度味つても味へば味ふほど滾々として不盡の靈味が湧いて來る。古典に浸

つて居る刹那は、古聖者の深い體驗が自分の胸に脈搏つて居る。同化、渾融、妙會、致一の心境に入つて彼我未分の一境をさながらに握るのである。古聖の體驗其の儘が直ちに自分の體驗である。即自にして即他の直證地に立ち得るのである。

私がゲーテの『ファウスト』やダンテの『神曲』に新らしい生命の泉を見出したのは其の後の事である。鷗外先生によつて獨逸語の手ほどきをして頂いた自分は唯だ多年憧れて居つたゲーテの『ファウスト』を其の原作で味はひたい一念に驅られて語學の研究に猛進した。『ファウスト』の「ツァイトゲメング献本の詞」を始めて原文で讀んだときの喜び、今に忘れられない記憶である。爾來『ファウスト』は私の熱愛書の一になつて了つた。私は毎年『ファウスト』を一回宛讀む。讀めば讀むほど私は新らしみを感じず。驚くべき魔力に満ちた暗示に富んだ書だ。神の書いたやうな驚異の書だ。ダンテの『神曲』は若し『ファウスト』が人間の「大」を語つて居ると云ふ事が出来るなら『神曲』はその「深」を語つて居ると云ふことが出来るだらう。私に取つては『神

曲』は私の一生涯を通じて味つても尚ほ其の力の足らざるを感じて居る。『神曲』を讀むべく私は幾度伊太利語を始めたか知れない。始めてはやめ、やめては始める。今に物にならない、併し一生に一度『神曲』を其の原語で讀んで見たい。私のダンテ熱は此の神の書を原語で味ふまでは熱して已まない。

ニイチエの『ツアラツストラ』やメエテルリンクの『貧者の寶』を讀み始めたのは近年のことである。兩書とも世界傑作の一たるを失はない。詩と音楽と宗教とが混じて一つに響いて居る作だ。『ツアラツストラ』が音楽で現はした哲學と云へるなら、『貧者の寶』は散文で書いた音楽だ。私はメエテルリンクを讀むために晩年になつて佛語を初めた。私は世界の傑作は其の原語で讀まねば其の眞の味に徹し得ないと思ふ。斯うした考へは私をして非常な困難を排してまで語學研究に若返りさせて居る。私はそれを幸福と思つて居る。

スピノザの『エチカ』に行き、カントの『純粹理性批判』に行き、シライエルマ

ツヘルの『宗教論』に行き、ベルグソンの『創造的進化』に行き、更に翻つてプラトーンの『理想國』に溯る。私の哲學熱は哲學より宗教へと云ふ道を辿つて中世紀の神祕派のエツクハルトやヤコブ・ベーメやタウルス等の幽玄な思想に自分の魂の住宅を求めずには居られない。中世紀の神祕な世界に薄暗い光を仰ぐと同時に私の魂は近代文學に其の深刻な人間味を味はずには居られない。先づ私はイブセンに行つた。ドストイエフスキーに行つた。ストリントベルヒに行つた。メレジコウスキーに行つた。劇と小説とは私に人間味を語つてくれて居るが私はどうしてもそれだけでは満足をなし得ない。私は詩に走せて私の渴しきつた自然に對する憧れの魂を癒さずには居られない。獨逸詩人として私はゲエテの外にシラー、ハイネ、リュックルト、ウーラント、ノファリス、チイク、アイヒェンドルフ、メーリケ、レナウ、キヨルネルを取り、英詩人としてワーズワースの外にバイロン、シエレー、コールレツデ、キーツ、ロセツチ、スキンバーン、テニスン、ブラウニング、イエーツ、

ユーイーを取り佛白詩人からユーゴ、ヴェルレーヌ、サマン、ヴェルハーレン等を取り、米國からホキットマンを取る。

讀みたいもの味ひたいものは限りもなくある。限りある精力と限りある時間とで限りない要求に満足を與へることは到底不可能である。せめてはそのうちの四五なりとも精選して私の一生涯を通じて愛讀身讀して見たい。著者の體驗を自分の體驗にして見たい。

私は私の貧弱な書齋に最近二つの愛讀書の新たに加つた事を喜ばずに居られない其の一は『華嚴經』(六十)であつて今一つは西田幾多郎博士の『自覺に於ける直觀と反省』とである。『華嚴經』が世界有数の書物である事は今更言ふまでもないが西田博士の此の著述は現代の思想界に於て獨創的權威あるものとして誇るに足るべきものであると思ふ。私は斯うした傑作が我邦の思想界に産れ出でた事を今日の貧弱なる我邦の思想界に對して如何に重大な意義を加へて居るかと思ふことを思ふて感

謝に溢れ喜びに満たされて居る。

(四) 神祕の生活

私は「神祕」の前に禮拜する。神祕は神の姿であるからだ。神祕なしには禮拜はない。神祕のないところに私の魂は飢を感じる。私の魂に取つて無上の糧は「神祕」そのものである。

「魂の目覺」に生きて居る現代藝術は單なる現實や單なる自然の境を踏み越えて深く現實の奥自然の奥に分け入つて、そこに輝いて居る新らしい「神祕」其の物の光の前に跪いて居る。深い意味の「夢の國」は深い意味の「現實の國」である。單なるあるが儘の現實は眞の現實ではない。現實の奥に輝いて居る神祕に觸れた時にのみ「現實」が現實としての眞の意味と價值とを發揮する。そこには一つの樹、一つの石さへも唯だの石、唯だの樹ではない。樹そのものが光であり、石そのものが靈である。そ

こにはアーサー・シモンズの謂ふ所の「目に見える世界がもはや現實ではなく、見えない世界が夢ではない」と云ふ體驗の世界がある。然り神祕それ自らは「火のやうな生命の體驗そのもの」である。神祕を生くる生活が體驗者の生活である。私其の生活は神祕に觸るる生活なしには何物もないのである。神祕なしには深い生活はない何んとなれば神祕其の物が生命の姿であるからである。

謂ふ所の神祕とは決して朦朧な縹渺たる霞に包まれた薄絹のやうな世界を云ふのではない。神祕は極めて透徹清澄の世界にある。生命の深い體驗者にとつては平凡なる一石一木でさへも神祕の極みである。神祕生活の體驗者は物そのものの生命に喰ひ入つて其の中心核を掴む生活者である。彼に取つては「我茲に在り」と云ひ「我は我なり」と云ふ純粹經驗それ自身が驚くべき神祕である。

「靈の力は舌で言ひ表はし得べきものではない」とメエテルリンクは云つて居る。然り神祕の境は言語に絶した境地である。言語に絶した境地なるが故に靈そのもの

が如實にあるが儘を語つて居る。そのみが如實に生命を掴み得る純粹の體驗境である。此の境地に生くべく私共の生活は其の歩を進めて居るのではあるまいか。神祕の體驗なき生活は生活として生くべく意義もない價值もない生活である。

單なる「現實」にのみ囚へられ過ぎて居る現代生活は唯だ「神祕」に生くことに依つてのみ其の囚はれから解放され得るのではあるまいか。「夢」に生き「詩」に生き「神祕」に生くると云ふことが深い意味に於ての眞實の生活ではあるまいか。夢や詩や神祕なしに生くる巧利的な利害得失の觀念にのみ支配されて居る生活は呪はるべき生活ではあるまいか。

「私たちが目を擧げる時、魂は無意識に非常に清い思想や衝動に縊り込む爲めに、太陽や星の光線に憧憬するのだ」とメテルリンクの云つた言葉は、私共の魂が神祕を糧として生きて居ることを語つて居るではないか。私共の魂が太陽や星の光に神祕の國を見出したときに、私共の魂は眞に生き得るのではないか。

(五) 思ふ儘の生活 — (一夜の冥想)

私は思ふ儘に生きたい。何等の拘束のない自由濶達な境地に自分の身を置いて、思ふ存分自分の要求に生きて見たい。

自分は人から他律的に支配されるやうなサラリーマンにはなりたくない。資本家の恩恵に生きて居るやうな意味の労働者にもなりたくない。自分の思ふ事の書かれない記者生活もしたくない。勿論官吏や官僚式の仕事は一切大嫌ひだ。

私は私自身が生きる道に生きたい。何等の支配をも受けない何等の壓迫をも感じない自動自律の生活に生きたい。眞の意味の労働人になりたい。而して悠々自適の境地に生きたい。さうした境地に立つて私の與へられた凡てを與へたい。私の一切の生命を發揮して仕事に生きたい。斯うした世界を創造したい、見出したい、自分のものにしたたい。

十分に讀書の出来る、散歩の出来る、冥想の餘裕のある、人と話す機會のある、小集會に出席の出来る、研究に没頭することの出来る、自由に筆を執つたり講演をしたりすることの出来る境地に身を置きたい。自分の生活が其の儘私の生活であつて同時に其の凡てが社會奉仕の生活であり得るやうな生活。私の望んで居るのはさうした生活である。自己奉仕即社會奉仕の生活である。文化運動や社會改造運動が其の儘自己生活になり得る生活だ。

斯うした事が單なる一場の夢であらうか。満たされない我儘な要求であらうか。否、私は思ふ、斯うした生活が私のやうなものに取つては本統に自然な生き方であつてそれが眞の正しい生き方であると。私は自分で斯う肯定して居る。

問題は經濟生活だ。私の斯うした生活には經濟生活が伴ひ得るかどうかは私にも問題だ。私のやうな人間一人位を道樂に一生涯全く無條件で經濟生活の擔保をして呉れる様な理解のある人はないであらうかとも考へて見る。私のやうな經濟上の生

き方に迂い者に取つては、自らパンを取りつゝ自分の生活を支へると云ふ事が非常な苦痛だ。寧ろ食はずに生きる道があればと考へさせらるることもある。家族と云ふものを有つたのが私の一生の失敗ではなかつたかとさへ思ふ。でも私は私に與へられたものを自分で否定するのは恐ろしいやうな氣もする。どうして生きればいいのか。死すべきか、生くべきか。現代生活——經濟生活——に於て痛切に考へさせらるるのはパンに脅かされて居る私の斯うした問題である。

私は今眞劍に考へて居る。眞に生きる道を辿ると云ふことが如何に困難であるかと云ふことをつくつくゝと味はさせられて居る。

私の胸には苦しい痛みがある。「現在」を棄てきるかと云ふ聲である。さうだ、斷じて現在を棄てやうとも思ひつめることもある。自分だけならばとも思ふ。不純な世の中がいやになる。隱遁氣分にそゝらるる事もある。

突然天の一角から聲が落ちた。「汝、愚なる者よ、汝は今汝のみに生きやうとして

居る。愚なる者よ、汝の考へは自滅の道だ。我よりも汝自身を愛するものは我に協はないのだ。我よりも汝の妻子を愛する者は我に協はないのだ。汝一切を棄てその十字架をとりて我に従へ。而して汝の道を歩め」と。私は嚴な聲によつて目覺まされた。私は一切を棄てねばならぬ。私は今死なねばならぬ。而して十字架を負ひつゝ聖旨に従つて生きねばならぬ。生涯「血と火」との苦みを味つて戦はねばならぬのだ。さうだ此の外に生くる道はない。斷じてないのだ。私の生活は死を透ふしてのみ眞實の生に生き得るのだ。

(六) 土に親む生活

私共の生活は餘りに土に離れ過ぎた。もう一度土に歸らねばならぬ。土に歸らねば私共の生活は死を免れない。

土は私共の魂の母である。一切の生物も一切の人類も土の懷から生れた。土は生

欠

欠

は妙い。基督や釋尊のやうな方はその自分の姿を徹見した生活に入つたのである。そこに彼等の神らしい姿が輝いたのである。

私共の魂は私共が思つて居るよりも更に幾層倍か偉大な、莊嚴な、森嚴な、尊貴な、豊富な姿を有つて居るのだ。一切の過去も一切の未來も生きた現在も凡てが自己の深みのなかに包まれて居るのだ。一切の萬有も、一切の人生も、一切の時間も一切の空間も私の魂の所有だ。私自身は私に取つては不滅であり、永遠であり、無限であり、絶對である。私は自分の魂の醜さを凝視すればするほど、自分の魂の驚くべき美しさに目覺めずに居られない。私の魂は私の衷なる神だ。私はホキットマンと共に「私は完成されたものの頂點だ、又來るべきものの保有者だ」*I am an acme of things accomplish'd, and I an encloser of things to be.* と叫ばずには居られない。私は單なる自尊自大の態度を惡む。私は謙虛柔順な態度で自分を洞察して見る私は私を完成してくれるために凡ての力が一瞬間も休むことなく働きづめに働いて

居ることを感ぜずには居られない。私一人のために星も照つて居るのだ。花も咲いて居るのだ。水も流れて居るのだ。火も燃えて居るのだと思ふ。

深い自己に目覚めたものに取つてのみ自分の姿がありありと見える。私共は何物も侵し得ない自分の領土を發見して占領せねばならぬ。何物よりも尊い自分の魂を保有せねばならぬ。私共は深く生きることによつてのみ自分の衷に「神」が生活を始め永遠に活動して居ることを自覺するのだ。

現代文明は餘りに外部の生活にのみ生き過ぎた。私共は今「内部生活へ」の回轉期に立つて居るではないか。自己の絶対價值——基督の謂ふ所の全世界よりもより價值あるところの——を體驗せねばならぬ。放蕩兒が遠國へ旅して窮した汚菜、豆殻を食して己が腹を充たしたやうに、現代文明は豆殻文明であつた。現代人の魂が自ら衷に省みて「我は飢えて死なんとす」と云ふ絶望の聲を聞かねばならぬ時代が私共の脚下を見舞つて居る。廻轉！ さうだ。唯だ一切が廻轉を要するのだ。其の外に道がない。

一大廻轉！ 深刻な廻轉！ 私共の要するものは斯うした廻轉の力だ。基督は嘗てガリラヤ湖畔に立つて叫んだ。「天國は近づけり悔ひ改めよ」Thut Busse, denn das Reich der Himmel its herbeigekommen. と。「悔ひ改め」の叫びは過去二千年の前に於て要したのみでない。「今」がその時だ。人間は然り地上一切の人間は今や魂の耳を敬て「天」よりの此の叫を聞かねばならぬ。

哲人カール・ヨエルは云ふ「一切の歴史は自然を人間にまで高めるのだ」と。又曰く「一切の萬有は戦だ。現はれた混沌だ。だがそれは秩序整然たる宇宙だ。組織化された藝術品だ」と。今、私共は人類歴史の新らしい廻轉盤上に立つて居る。自然を人間に高め、人間を神に高める時代が來た。ニイチエの謂ふ所の「超人」が生れねばならぬ時代が來た。一切の人間が凡て超人にならねばならぬ。そのとき「戦」と「混沌」とが「コスモス」と「藝術」と共に手を取つてダンスをする新らしい「哲人

の王国」が始まるであらう。神の自由の榮光の國土は斯うしたところに其の未來の光を放つべきである。

(八) 心證の生活 — (斷片語)

死は一切の上に普遍な力を有つて居る。併も此の死の普遍な力の下には微妙な生命の血が流れて居る。「死」のないところには眞の意味の「生」はない死は一切のものを生に導く天使である。

生命が如實に其の姿を現はした所のみ音樂がある。音樂のあるところのみ詩がある。詩のあるところのみ宗教がある。宗教は宇宙生命が具體的な其の姿を生活體驗のなかに音樂的律動によつて發揮した詩である。宗教生活の内容には深い詩が生きて居る。深い體驗の意味で詩を解し得る人にのみ宗教の深みが解し得ると思ふ。

ふ詩のない宗教は宗教の形骸は過ぎない。

私はベルグソンの哲學に深い趣味を有つて居る。ベルグソンの哲學は私に取つては音樂であるからだ。私はカントの哲學に強く引きつけられる。私に取つてはカントの乾燥無味な文字のなかに詩がところ／＼オアシスのやうに發見されるからである。

眞宗の流れを汲むともがらが純他力に立つて宗教の姿を眺めて居るときほど純自力の體驗境に入つて居るときはあるまいと思ふ。私から見れば淨禪一味、自他相即の境にして始めて宗教の境地に達し得るのであらうと思ふ。

「二にして一」とよく云ふことであるが「生きた一」そのものは決して二になり得

ないではないか。一尺の絹を二つに割いて五寸宛となし、その兩片をつぎ合せても再び元の一尺になし得ないやうに生きた一尺は其の儘にして一尺である。一が二になつたときには純真な生きた一は既に死んで了つて居るのではないか。又二がどんなによく融け合つた所で本來の一にはなり得ないと思ふ。純真な一は永遠に一ではないか。其の一を掴むのが、然り生きた儘の分離し得ない一を其の儘に掴むのが宗教上の體驗の境地ではないか。

情だの知だの意だのと分けて見るのが意識を死んだものとして取扱つて居るのであつて、生きた意識そのものは情でもなければ知でもなし又意でもないのだ。何と名を付けていいか分らないのだ。渾一の境は名目を超じて居る。此の意味に於て體驗の境は名がない。名目を空し説明を空じて居る。意識自らが意識する外に意識する道が絶対でない。

「無」と云ふのが一番よく「有」を語つて居るのである。一切の文字や説明がなくなつたときに於てのみ、眞の體驗の境地がさながらに鮮かに語られて居る。「四十九年一字不説」と云つたのがこのことだ。基督が「眞理とは何ぞや」と云ふピラトの審問を受けたときに「イエス默然たり」と記されて居るが、此の默然の一境のみが一切を示して居り一切を説明して居る。

「黙のとき説」と云つた古聖の心證の境地が私には今更のやうに味はれる。「絶言絶慮、處として通ぜずと云ふことなし」と歌はれた古詩人の境地に深い意味を見出さずには居られない。

宗教に基礎附けられた一切の生活は「黙」の心證に入るところから光を放つて來

る。「イエス默然たり」の境がそれだ、默照の境と云はうか。光耀の境と云はうか。ただ一切が光明となつて照つて居る。生命となつて躍つて居る。神と神とが手を取つて遊んで居る。體驗の境地は遊戯三昧の境地である。遊戯三昧なるが故に無限活動の無碍境である。

(九) 思索の生活

思索のない生活は深みのない生活である。

私共は生きて居る。生きるとは内部生命の根本活動によつて認識し感情し意欲することである。斯くして私共の生命は其の本來の姿を分化し發展して更に其の分化し發展したるものを統一し綜合して新しい未踏の境地に足を踏み込んで行くのである。

私共の生活が深い思索に生くれば生くるほど私共の生活は内面的に統一せられ綜

合せられて自己存在の意義を基礎附けて來るのである。そこから宗教と哲學と藝術とがその生活内容として具體的に自己表現に生くべく其の姿を表はして來るのである。

私共の生活に於ては生命の自己認識が最も深い思索の目的である。生命の自己認識なしには私共の生活は無意義である。生活の價值も生活の體驗も此の生命の自己認識を外にしては何等の根柢を有たない。生命の自己認識即ち全體としての生命の具體的把握は私共の生活體驗が深い思索の境地に入つて其の源泉に掬むところから始まらねばならぬ。勿論私共の生活は情調の世界に藝術の豊かな潤ひを味ひ、其の露にしつとりと濡れねばならぬのであるがそれと共に思索の静かな寂しみの世界にしんみりと深入して物その物の真相を心穩かに凝視し洞察せねばなりませぬ。

深い思索の生活なしに單なる情調の流れにのみ漂ひ、或は安價な低劣な信仰生活に酔ふて流されて居る生活ほど私共の生活に取つて不眞面目な且つ危険な生活はな

い。私は思索の嚴肅な眞實な生活を辿る者のみに許された眞の深みのある生活を味ふべく私共の生活が更に認識の世界に知識の本源を尋ね形而上學の世界に實在の生命に觸れる新らしい生活の道を開拓し行かねばならぬと思ふ。

私は深い思索の中に徹底的な生活に生きたい。燃ゆるやうな白熱的な思索の根本衝動が私の全心靈を擱んで形而上學的な絕對實在の世界に自分を高めて行く。く祈らずには居られない。而して思索そのものがやがて體驗の生活そのものとなつてそこで燦として輝き出づる永遠の光を仰ぎ見るまでは進まずに居られない。普遍、世界絶對の世界が特殊的な個別的な自我の色彩を以て色づけられたときに、否自我其の物が普遍絶對の内容として「全」のなかに生き切つたときに私共の思索生活その儘がやがて體驗の生活と化り得るのではなからうか。思索より思索へと辿る生活は遂に内部生命の奥底に直入して鏗鏘たる實在の音色ねいろを聞き得るのではなからうか。「言思ごんし廻かに絶す」と云ふ實在の一路が言思の荆棘林を透過してそこより開け來る

のではなからうか。斯くしてやがて思索生活の聖地よりして詩が生れ、藝術が花咲き、宗教が育まれ、哲學が實のるのではなからうか。

私は倉田百三氏が其の近著『愛と認識の出發』に於て「耽溺、刹那主義 Pleasure Hunter. 何と云ふ嫌な響きであらう。思索だ!! 思索だ!! 永遠にして崇高なものをぐつと握り締める迄は私共の爲すべき全ての事は只思索あるのみである」と云つた事に賛同せず居られない。

(十) 歡喜の生活

吾々の生活に無上の喜びを與ふるもののみが私共の所有である。所有すると云ふことは喜びを感じると云ふことである。生命が本來の眞相を發露する時の音樂のリズムが創造生活の喜びである。生活に即した眞の所有の喜びは此の創造生活に於て「生命」それ自らが産れ出づる喜びでなくてはならぬ。吾々は此の喜びを吾々の生活

そのものの中で味はねばならぬ。謂ふ所の宗教生活とは此の生の創造の喜びの生活である。若し私共の生活が喜びの創造生活に生くることが出来ないとするればそこには眞の意味の生活はない。斯うした場合には私共の意識要求は當然その生活から逃れて他の生活に移るべく強い深い内部生命の衝動を感ぜずには居られない。若しさうでないとするれば生活それ自らが私共の重荷となつて来る。生活が私共の重荷であるとき程私共に堪え難い苦痛はない。人は斯う云ふときに生活の重荷を抛つべく其の生を棄てるのである。假令その生の苦痛に堪えて生活を續くるとしてもそれは生きた生活の姿ではなくしてほんの一次的のものであつて眞の生活の永遠性を價しない。本來吾々の生活は吾々の意識の表面を掠め去るが如き皮相的放浪的なものであつてはならない。生活は生命の底に徹しなくてはならない。眞の生活はそれが全意識の要求に無上の満足を與へ喜びを與へる所のものではなくてはならぬ。

私共の日常の生活は平凡な現實生活は私共に取つて此の全意識の要求に對して全

満足を以て應へられて居るかどうか。深く考へれば考ふるほど私共の現實生活の大部分は私共にとつて無意味なものであり無價値なものであり實に下らぬものではあるまいか。若し私共の現實生活が下らぬもの無價値なもの無意味なものでありとすれば私共は私共の日常生活を根本的に改造せねばならぬ。若しくは私共の生活を否定せねばならぬではないか。改造乎、否定乎、此の二つの道の外に私共の行くべき道がない。若し然らずんば私共は囚へられたコンヴェンショナルな道を妥協的に歩みつゝ「死の國」に行くまでのことだ。しかし本能的な生活衝動の要求からして生活の否定は到底不可能のことと見ねばならぬ。さうすれば私共は私共の生活を根本的に改造するの道を辿らねばならぬ。從來の因襲を破り習慣を離れ傳統を無視し束縛を蹂躪して新らしい道を辿らねばならぬ。生の深みに徹して新らたに創造生活そのものの中に新所有の喜びを味はねばならぬ。吾々の前に開展して居る此の全萬有を吾々の新所有とすべく、吾々の前に横はつて居る此の全人生を吾々の新所有とすべく、

然り一切を「我」の中に生かすべく目覺めねばならぬ。斯うした新らしい道を進み此の全萬有と全人生とを吾々の所有とすることが眞の意味の生活である。これらが私共の生活の核心に於て生命附けられ生きた交渉に生きて來るときに、ここに私共の生活と脈々相觸るる所がなくてはならぬ。基督が「父は我に萬物を與へ給へり」と云つた此の一境の深い消息が生活の意義を語つて居る。ここには創造の生活と所有の生活とが別々の道を辿つて居るのではない。所有生活が其の儘に創造生活となり、創造生活が其の儘に所有生活である。(ラッセルの所有衝動より創造衝動へと云ふ見方は未だ生活の眞に徹して居らないではあるまいか。否彼の見た所有生活は未だ眞の意味の所有生活ではなくして皮相的な物質的な經濟生活に於てのみ意味付けられて居つた所有生活の弊を指摘したに過ぎないと思ふ)。兩者は互に生きた生活に於て「一」のなかに呼吸し合つて居る。創造生活の所有生活のと區別する要は此處には認められない。ここでは一切が喜びのなかに生きて居る。渾然たる生活のリズムが

私共の中に響いて居る。

斯くして全萬有と全人生とを吾々の生活に生くること、吾々の生活に於て吾々の所有とすること。斯うした生活が吾々の精神生活の奥を流れて居ると云ふ自覺に生きたとき、そこに無限の價値を認識し、其の價値を絶對的實在の基礎付けによつて開顯して行くと云ふ所に私共の生存の意義があり生活の價値があるのではないか。私共は如何にして「此の一境」に立つべきかと云ふ眞摯な要求に目覺めねばならぬ。そのとき始めて私共の生活が「宗教」に目覺めて來るのではないか。惟ふに此の生き方が宗教生活に——未踏の一境に——踏み入る第一歩ではなからうか。

(十一) 古典生活

古典に生きよ！ 私は斯う絶叫したい。古典は最も深い生命の流れであるから。

文藝復興期に於て歐洲の思想界が希臘羅典の古典復活によつて如何に深く人間味

の生活に生きたかは私の今茲に言ふまでもないことである。

私は再び叫ぶ。古典に生きよと。古典は人間生活史の真髓である。古典は人間生活を歴史のランピキにかけて其のエキスをコンデンスしたものである。古典の研究は人間其の物の研究である。

現代は深い意味に於て「人間」そのものの生活に生くべき時代である。人間そのものに生くるには先づ人間そのものの精神をコンデスしたる古典に行かねばならぬ。古典が新らしい生命を人間生活に與ふるためには基督教に於ける聖書の如き、儒教に於ける經書の如き、佛教に於ける一切の經典の如き、無限の價値を内在したる文獻が私共のために保存されて居る。此等の文獻は道德と藝術と哲學と宗教との無盡藏な一大寶庫である。

此の一大寶庫が人類の文化に貢獻した跡は枚擧に遑がない。私共は今茲に其の繁を繰り返へすの要を見ない。唯だ此等の寶庫のなかには汲めども汲めども盡きざる

靈泉が今に尙ほ滾々として湧き出でて居ることを忘れてはならない。現代の思想界が單に「新」なるものに憧れ、流行より流行に走り、皮相より皮相に流れ、健實精緻の研鑽を缺き、熱烈深刻なる體驗なきため、真理の奥扉を開く力なく、宇宙の幽秘を開く道がない。世は實利厚生にのみ重きを置き、人生の意味宇宙の實相に就いては何等の思索もなく何等の體驗もない。斯くて人は亡び行くのである。

泰西古典の研究は暫く措く。私は今や東洋古典の研究に體驗に新生面を開拓すべきの時代だと思ふ。思想の流れは今や東洋文化の精髓を全世界に發揮すべき時代を我々に語つて居るではないか。

東洋の古典即ち儒教乃至老莊の典籍。基督教の聖典。日本の古典。印度、支那、日本に發展したる佛教に關する文獻。此等は人類の生んだ人間生活に於ける最大最深最高の文獻ではないか。今や東洋の思想界は古來幾千年の昔より秘藏せられたる幽玄な光を全世界の思想界に對して貢獻すべき一大轉機に際會しつゝあるではないか。

誰か東洋思想を指して「時代後れ」なりと云ふ。寧ろ東洋思想こそ世界に於ける精神文化の最も古くして最も深く、最も豊かにして最も新しい思想ではないか。此等の文獻には永遠の清新さが輝いて居るではないか。私共は餘りに多く自己を忘れ過ぎて、餘りに多く他に盲從し過ぎた。今や「自己自覺」に徹すべき秋が來たのだ。古典に生きよ！ 殊に東洋の古典に生きよ！ 私共は斯う叫ばずには居られない。私は敢て「生きよ」と云ふ。然り單なる研究は私共の生命となり得ない。私共は古典に肉薄し、其の血を飲み其の肉に喰ひ入り、其の生命の脈搏に觸れて古典に生きねばならぬ。生命それ自らとして古典の精神を自己に體驗せねばならぬ。直ちに生命を自己自らを把捉せよ。そこにはのみ私共の生きる道がある。

私は思ふ、恐らく廿世紀後半の文明は東洋の深遠奥妙な古典的精神が新文明のなかに織り込まれて新たに光を放ち、「光は東方より」と云ふ言葉を文字通りに世界に光被する時代が、それが私共の前に實現せらるる時代が見舞つて來るであらうと思ふ。

私共は斯うした自覺に今日覺めねばならぬと思ふ。私は信ずる、一切の深奥なる思想は東洋の文獻中に秘藏せられて居ると。また私は思ふ、從來斯うした幽玄深遠な東洋思想はその一小部分を除くの外は未だ嘗て世界的文化に紹介せられ理解せられた事がなかつたのではあるまいかと。従つて全世界は未だ「東洋の奥殿」を開いた事がないのだ。現代文明の發展は今や物質的文明の破綻より更に一轉して精神的文明の後を追ふて「神祕」の世界に向つて其の新らしい進路を求むるに急である。東洋文化は「神祕」そのものである。「生命」そのものが「神祕」の姿に於て如實に直接に自己を開顯して居る文明が東洋の精神文明である。東洋文化の光を發揮すべきは今である。世界は其の破綻したる文明の救済を東洋文化の精髓に觸るることに依つてのみ其の復活を希求しつゝあるではないか。唯だ恐る、此の無限の言を藏する東洋自らが自己の富の其の深さ其の高さ、其の大きさを自ら認めることが能きないために、此の無盡藏の寶庫をば却つて彼等西歐人の手によつてのみ遂に其の奥扉を開

かるるに至るのではないかと。燈臺下暗しと云ふことが此の場合にも適用されねばならぬとは私共の堪えない苦痛である。勿論宇宙の眞理は何人の手によつて發見されたところで其の眞理たるの價値に於て優劣はない。ただ私共は吾等東洋人が自己の文化人たる使命に目覺め得ないことを悲むのである。私は思ふ、我等東洋人殊に日本人の文化的使命は此の東方の光を世界に發揮して來るべき新文明に貢獻することの外に其の眞正の意義がないことを思ふ。私は「覺めよ東洋！ 覺めて汝自らの富を知れ！」と絶叫せず居られない。憐むべきは自家自らの富を知らずして他の寶を數ふる短見者流の生活だ。言ふまでもなく自を知り他を識るにあらざれば眞に生くることは能きない。私は敢て西歐思想を疎外するものではない。私共が西歐思想に學ばねばならぬことは頗る多い。私は此の點に於て他の何人にも譲らないほど西歐思想の豊さと其の深さとを味つて居る。ただ私は東洋自らが目覺むることによつて全世界が新らしい道を歩み得ることを信ずる。東洋自らが自覺することによつて

世界をして新らしき文化に生かしむることができると思ふ。さうした道が今私共の前に開けつゝある。それを痛切に自覺するところに、さうした態度に身を托するところに私共の生くる道がある。古典に生くる道は世界を新たに生かす道ではなからうか。全世界が「東」に生くる日が今將に曙の光のやうに私共の前に來つゝあるてはなからうか。

(十二) 深い戦ひの生活

現代人には深い戦ひの生活が乏しい。深い戦ひの生活とはいのちがけの生活である。血の出る生活である。死を透ふして戦ふ生活である。

耽溺に流れ、享樂氣分に充ちた、生の安價な肯定にのみ生きんとする現代人の生活に深刻な死を透ふして戦ふやうな深い戦ひのないのは怪むに足らない。併し私共の魂の深い要求は到底單なる享樂氣分のみ生くる刹那主義や耽溺主義の生活では

満足が能きない。

深刻な罪惡感に打たれたことのないものには魂の深いわななきがない。魂の深いわななきの經驗を味つたものでなくては深い戦ひに血の出る生活に、然り人生の眞の勝利に新らしい生命を見出し得ないのだ。パウロは此の難關に肉薄した一人である「我は肉なる者にして罪の下に賣られたり。そは我が行ふ所のものは我もこれとせず。我が願ふ所のもの我これを行さず。我が惡む所のもの我これを行せばなり」。斯うした苦い痛い血の出るやうな實驗が彼の魂を嚙んだ。

「噫われ惱める人なるかな。この死の體より我を救はん者は誰ぞ」

と云ふ眞劍な至痛は深い戦慄の叫びを放つて居る。斯うした經驗の所有者であつたればこそ彼は「最早われ生くるにあらず、基督我が裏に在つて生くるなり」と云ふ宗教生活最深の體驗に立ち得たのである。

人間の目的そのものである宗教生活の至深の境は、斯うした體驗によつてのみ吾

々の生活の中に絶對價値を生み得るのである。永遠の生命を得んとする此の苦い惱みの生活を透ふして輝き來る「内なる人」の光はやがて神そのものの光ではないか。ヤコブ・ペーメが謂ふ所の「最深の内生」は斯うした道を辿つて神に到るのである。

「翻された眼」の所有者でなくては斯の境地に參じ得ないのである、

聖アウグスチヌスは斯うした道を辿つて神に行つた。聖フランチェスコもまた斯うした道を辿つて神に行つた。トルストイは

「私が出る道のないことを知つてゐる森の中の人間のやうであつたならば、私は生き永らへることが出來たであらう。然し私は森の中で道を失ひそれを怖れて出口を見出さうとして飛び廻り進むに従つて益々道をはぐれたるに過ぎないことを知りつゝ、猶ほ丘つ前や後ろに走り廻らずに居られない人間のやうであつた。恐ろしいのはこれであつた。それから逃れる爲に私は自殺し様としたのはそれであつた。暗黒の恐怖が負ひ切れない程大きかつたので私は一本の紐か一個のピストルによ

つて夫れから逃れることを希つた」(懺悔録)

自殺までしても此の苦痛と恐怖とを逃れやうとして戦つた眞剣なトルストイの生活は此の死の苦みを透ふして更に新らしい光に導かれた。然るにも係らず彼の残る半生は猶ほ且つ此の新らしい光を眞實に掴まんとして苦悶懊惱の生活にしどろもどろの深い戦ひを続け通しに續けた。どす黒い強い肉の所有者であつただけその戦ひも強かつた。併しトルストイの胸のどん底には常に絶へず純な尊い光が輝いて居つた。斯うした矛盾に泣いた彼は自己内面の生活と自己外部のそれとの間に大なるギャップのあるのに驚いて遂に出家するの已むを得ざるに至つた。彼の心が彼を逐ひ出したのである。彼はどうすることもできずに最後の一路を出家に見出したのである。飽くまで戦ひ續けた惨めな彼の一生は敗北の中に勝利を得た。「地上より燃え上る炎々たる烈火」(西田博士の言葉)であつた彼の宗教生活は私共のために眞の眞剣味のある生活を示してくれたのであつた。

安價な平板な薄つぺらな上塗りした現代生活に囚へられ安い私共の生活に斯うした眞剣味のある狂ふやうな生き／＼した生活ぶりを見せてくれたトルストイの一生はそれ自らが深い戦ひの一生であつた。私共は彼の死によつて生きた三十棒を與へられたのだ。此の三十棒を喫し得るものにして始めて宗教生活の體驗境に入り得るのではないか。

私は今の私共の生活の餘りに妥協味の多いのに言ひ知らぬ不満さと淋しさと物足らなさを感じず。大死一番底の強い深刻な經驗のみが、然り「血」を以て裏書された生活のみが私共の眠つて居る魂を呼び覺ますのである。宗教の本質は「十字架」の裡にのみ輝くのだ。

(十三) 夢見る生活 — (新文明の曙光)

私の生活は夢見る生活だ。夢のないところには私の生活はない。

私は夢を語つて生きて居る。夢が私の宗教だからだ。私は夢の宣傳者として私の使命に生きたい。

「我(神)わが靈を凡ての人に注がん。

汝等の子女は預言すべし。

又汝等の幼者は異象を見

老者は夢を見るべし。」

と古聖は歌つて居るが、單に老者のみが夢見るのではない。神の靈を注がれた一切の人は夢を見るのだ。

夢のない生活は理想のない生活だ。生命のない生活だ。濡ひのない生活だ。死んだ生活だ。人間生活は夢によつてのみ、然り高い偉大な夢に依つてのみ高められ純められ偉大化され無限化されるのだ。

孔子も嘗て「吾復た夢に周公を見ず」と云つて自己の衰へたことを嘆ぜられたこ

とがある。孔子の青年時代、彼が理想に生きた時代は彼の理想は周公であつた。彼は周公の道を當代に實現すべく夢見て居つたのである。

釋迦は世に生老病死の四苦ある現實の姿に驚いて此の現實の生活から此等の一切を遠離すべく解脱の世界を夢見て正覺の心證に體達された。

基督は罪惡に充ちた地上生活を靈化して「聖旨の天に成る如く地にも成させ給へ」と云ふ大理想を夢見て天の王國を地上に實現すべく努力し宣傳し其の生命を献げて十字架上の最後を遂げた。

偉大なる人格とは夢に生きた人格を謂ふのだ。自己の理想を地上に實現すべく夢みて戦つた人格を云ふのだ。偉大なる時代とは斯うした人格者を所有した時代を云ふのだ。

私は現代の生活に偉大な夢見る人を尋ねてその人を見出し得ない。終日秋を尋ねて秋を得ず、歸路會々夕空鮮かに結び出でたる赤柿の姿に「秋茲に在り」と叫んだ

聖者もあると云ふことだが、私は不幸にして現代生活に於て常に夢を尋ねて「夢玆に在り」と云ふ強い深い實感に觸れ得ないのを悲しまずに居られない。

人間生活は夢のなかにのみ、其の夢の實現に於てのみ吾々の神の世界に行く道があるのだ。夢を有たない生活は宗教のない生活だ。宗教とは地上に神の國を實現すべき努力に生くる生活である。斯うした努力に生きたものが眞の宗教人である。基督然り、釋迦然り、フランシス然り、親鸞また然り。一切の偉大なる宗教人とは夢によつて生きた人々である。夢の確さを信じて之を具體化することに生きた人々である。

私共の生活が餘りに現實にのみくつついて了つた結果現實そのものの本源を全く離れて了つて、切られた樹の枝のやうに枯れて居る。生命の躍動は何處にも認め得ないではないか。

「天に生くる」こと、さうだ「地に卽しながら天に生くる」ことが眞の生活ではない

か。天に生くることそのことが夢の生活だ。さうだ、天に生くることを外にして人間の生くべき道はない。古の人は凡て「天」に生きたものである。彼等に取つては「天」は生きて居る「神」の形象化した永遠の相であつた。夢の具體化した生き生きた姿であつた。「無限」そのものの生きた象徴シンボルであつた。支那人然り、印度人然り、ヘブライ人然り。然り彼等は大なる統一世界の絶対を母として生きて居つた。吾々は斯うした統一世界の絶対の懷から生れ來つて、分化發展の道を辿り、種々の分化相を透ふして、地上の人間生活に於て矛盾、衝突、鬭争、混亂の戦ひを續け、更に再び大なる統一の絶対母の懷に歸らねばならぬ。純粹經驗の一路を體驗してそこへ歸り行くべきである。神より出でたるものは「再び神へ」の道を辿る外に行くべき處がないのだ。そこにのみ純眞な道が開けて來る。現代文明は母の懷から遠く離れた放蕩文明である。地上の享樂生活にのみ囚へられて天上の淨福の生活を忘れて居る。私共は再び「天上へ」と叫ばねばならぬ。再び「夢の國」へと聲高く叫ば

ねばならぬ。天上生活のないところに眞の意味の地上生活の潤ひはない。「我等の國は天に在り」と呼んだ古の聖者の生活態度が慕はしい。謂ふところの「天上生活」とは單なる空想の世界ではない。私共の純眞に生き得る「地上生活」を意味して居るのだ。そこにのみ永遠の平和と永遠の愛とが光のやうに歌ふて居る。」

夢のないところには永遠の平和と永遠の匂ひがない。夢のない生活は生活のない生活だ。神のない生活だ。人間の生くべき國ではない。そこには獸のみ巢を喰つてゐる。そこには枯骨累々たる墓場がある。

斯うした夢のない墓場から——然り實業界も政治界も教育界も宗教界も、謂ふところの一切の現代社會は一種の夢のない墓場だ——人類を救ひ出すことが新文明の使命でなくてはならぬ。第二ルネッサンスの運動、夢の宣傳、新ローマンチズム、新理想主義、新神祕主義、表現主義、東西文明の内面的深化的融合、斯うした仕事を完成し行くところに新文明の唯一の道が開けて來るのではないか。私は斯うした

意味に於て再び「古典復興」を高く叫ばずに居られない。私の見るところでは斯うした文化運動の根本動方は古典のなかに内在して居ると思ふからである。古典の文化的研究は新らしい夢の復活に否創造に最も大なる力を生み附ける母ではあるまいか。新らしい文明の生兒は斯うした母の懷から生れ來るのではあるまいか。

(十四) 懺悔詩人の生活

私は今詩人ヴェルレーヌの詩に現はれた彼の生活を偲んで彼が懺悔の聲を聞きたいと思ふ。「その詩は自然に流露して滾々として湧き出づる泉のやうに盡きない。其の韻律は自由で何等の囚へられた所もなく調和して居る。其の句節は子供の輪舞のやうに廻りつゝ歌つて居る。其の止まるところに止つて居る。而して幽玄な美の中に溶けて行く——直に一つの音楽となる」とフランソア・コツペが評した詩人ヴェルレーヌの詩は近代佛蘭西の詩壇に於ける最も大なる傑作である。彼が幾多の詩の

中に於て其の最も純な宗教的精神を歌つた作に「智慧」*Sagesse* がある。

「日もすがら照り輝きし徒に美はしき日も今此處に臨終の銅色に戦けり。

憐れなる我が靈よ、

眼を閉ぢよ、夙く立ち還れ我が靈よ、

悪意の誘ひを、不淨の心をば逃れよ。」(柳虹氏譯)

Les fauxbeaux jours ont lui tout le jour, ma pauvre âme,

Et les voici vibrer aux cuivres du couchant.

Ferme les yeux, pauvre âme, et rentre sur-le-champ :

Une tentation des pires. Fuis l'infâme.

「悪念の誘ひ」と「不淨の心」とがヴェルレーヌを驅つて牢獄の苦しい生活を味はしめたのであつたが、今や彼は此の悪念の誘ひと不淨の心とを世にも恐ろしきものの最も恐ろしきものとして、其の囚へられた力から逃るべく苦い戦を續けて居る。

意志の弱い情に脆い詩人の常として彼は幾度か悔ひ幾度か祈り幾度か新らしい生活を踏み外した。徒に照り輝いて居つた「美はしき日」も今や彼の眼には「臨終の銅色」と戦いて見えたのである。あらゆる歡樂を味ひ盡くした彼は今や甘かつた歡樂の極めて淋しい悲しい苦がい果敢ないものであつたことをしみじみと感じて神に歸りつつあるのである。彼には

「日もひねもす長さ燭の雨と輝き、

丘の葡萄に照り映えて平地の畑に薄れ行く

かくて青き蒼空をしも蝕ばめば

その空は嘆きの歌を歌ひ出づ。」

Ils ont lui tout le jour en longs grêlons de flamme,

Battant toute vendange aux collines, couchant

Toute moisson de la vallée, et ravageant

生活の種々相

Le ciel tout bleu, le ciel chanteur qui te réclame.

かやうに見えたのである。美はしい自然の魔力も「青い蒼空」も「蝕ばんだ空」となり「嘆きの歌」を歌ふ空となつたのである。悲みの中に寂しさを味ひ甘さの中に物足らなさを味つた今日の彼には「昨日の日は吾が美はしい明日を食む」やうな心地がしたのである。されど彼は猶ほ「古き日の狂亂のなほも路上にのこる時」のあるのを氣づかつて思ひ煩ひに耽つた。彼の胸中一つの疑問が起らざるを得なかつた。即ち彼は

「斯る記憶、皆凡て打ち絶やすべき時ありや。」

Ces souvenirs, va-t-il falloir les retener ?

と思ひ續けては打ち慄いた。斯うした記憶の絶滅のみが彼の唯一の救ひであつた。斯うした記憶の絶滅を熱望しながらも之を絶滅すべき力の乏しかつた彼は「打ち絶すべき時ありや」と自ら目らの力を疑はずには居られなかつた。——而して彼はと

う、最後の「恐ろしき一撃」Un assaut furieux 然り「終焉」に想到せざるを得なかつた。さうだ、彼は最早人間の最後まで戦つた。彼は今や超人間の力に——神に——祈らざるを得なかつた。

「あはれ、あはれ恐ろしき暴風雨のために祈りをば捧げよ。」

O va prier contre l'orage, va prier.

ヴェルレーヌの「智慧」の巻は近代歐洲詩壇の最大驚異である。「智慧」に於ける彼は罪の暗黒の世界から救はれて、恵みの光の世界に於て直接に神に面して立つて居る。彼は今カトリック教の寺院の中に慄いて聖母の前に跪いて其の慈悲にすがつて居る。彼の信仰の辿りは近代の新らしい教會の新らしい主義のそれではなくして中世紀のそれであつた。彼の魂の辿りは「宏大にして優雅なる中世へ」 Verg. le moyen âge énorme et délicat. と赴くジャンセニストのそれであつた。彼は薄暗

中世紀の世界に、神祕な幽玄な寂靜な而して豊富な世界に彼の歸るべき故郷を見出した。靡爛し頹廢し切つたデカダントであつた彼は今や其の魂を純眞素朴な修道院の生活に還元しやうと苦心して居る。

「我が心は邪淫の教と悲しき肉體より離れて

過ぐる日の舵をとどめざるべからず」。

Qu'il faudrait que mon coeur en panne naviguât,

Loin de nos jours déspirit charnel et de chair triste.

邪淫の教と悲しき肉體の快樂に浸つて居つた彼はいま魂の新らしい目を睜つて新らしい天地を眺め、「過ぎし日の舵」をば投げ棄てて新らしい航路に進もうとして居る。渾身の力をこめて「破れた胸」を再び純に甦らせやうとして居る。「燃え熾なる、従順にして藝術家らしき」態度が何れの時か彼に其の最後の勝利を與へ得るであらう。果然、彼は其の勝利を贏ち得た。「王位官位何の價ぞ」と喝破してただ其の願ふ

ところは

「ただ生き生けるものにしどあれ、

吾は善行と正思との聖者たらむ。」

..... — à la chose vitale,

Et que je fusse un saint, actes bons, penses droites.

然り、「生き生けるもの」私共の要するものはただそれだ。魂の眞の所有すべきものはただ「生けるもの」のみである。「吾は善行も正思との聖者たらむ」と云ふ。あゝ何たる神々しい菩提心の發露ぞ。宗教的體驗の境に徹入せんほどの勇者にして始めて此の菩提心に生き得るのである。「聖者」然り此の境地のみが私共の行くべき境地ではなからうか。ザエルレーヌはあらゆる苦戰惡闘の後漸くにして此の境地に一步一步足を踏み込んで來た。

「高き教理と謹嚴の徳と祈禱の翼もて、

ただ十字架による唯一の熱狂に守られ、
あゝ狂ほしさに充ち充てる寺院よ。」

Haute theologie et solide morale,

Guidé par la folie unique de la Croix

Sur tes ailes de pierre, ô folle Cathédrale !

神に酔ふた人のみ味ひ得る敬虔の言葉だ。絶対歸依の信の一道にのみ生き得るもののみ味ひ得べき恍惚の神秘境だ。嘗て肉の快樂に耽つたヴェルレーヌは肉の世界に於て求め得ざりし淨福の醍醐味を此の高い尊い信の一境に於て味つた。彼は肉の生活により深く深入りしただけそれだけ彼の魂は靈の世界に於て更により高く高い光を仰ぎ見た。彼は今宗敎生活の最高頂に立つた。而して神より來る「我が子よ吾を愛せよ」と云ふ柔軟な御聲に目覺めた。「我が子よ」神より直接に此の聲を聞き得たヴェルレーヌは最早や肉のヴェルレーヌでもなく詩人たるヴェルレーヌでもなくして直

に「神の子」としての「人」たるヴェルレーヌである。彼は今「神の人」として神に面して起つて居る。

私はヴェルレーヌの「智慧」の巻を讀んで彼が如何に深い悲みと悶えの底から此の純眞な「信」を味ひ得たかを見て無限の力に動かされた。十字架の純眞味は悲みの曲によつてのみ味ふべき交響樂である。

(十五) 私の思想生活

今私は私の貧弱な思想生活を短く書いて見る。私の故郷は北總の五村と云ふ一寒村である。小學を卒へてから私は村塾に通つて五年間英漢數を學んだ。十八の年に小學に一ヶ年教鞭を執つて其の年の暮に上京して今のM大學に入つて法律や經濟や政治などを學んだ。其の當時の青年は多く政治趣味に耽つたもので私も一時政治に熱狂して將來の大政治家を夢見て居つた。其の内に父に逝かれ學資には窮し、夢見

て居つた幻は消え、暗い雲が私の魂を蔽ひ煩悶の手が私の胸を掴んだ。幾度か懷疑に脅かされ人生の意義に難まされ苦悶懊惱の極一道の光に接して生涯を神の事業に捧ぐべくA神學校に入つて神學だの哲學だの文學だのと云ふ方面に深い興味を有つやうになつた。三年間の寄宿舎を卒へて後ち九州に七ヶ年神戸に四ヶ年福井に四ヶ年、名古屋に來て既に十ヶ年になる。私の傳道生活は實に貧弱なもので自分ながら耻かしい。今日までに可なり多くの人々の魂に觸れて來たが何等の仕事らしい仕事も出來ず、何等の光をも傳へ得なかつたことを悲んで居る。併し此の間自分の内面生活の辿りを顧れば永い間には幾多の變遷があつた。私は本來儒教教育で育てられたものであるから、随分幼少の時から私の頭には孔子や孟子の強い感化が私を支配して居る。其の後法律や經濟を學んだ爲めに幾分社會的思想を與へられたのであるがさうした方面にはどうしても深い趣味を有ち得なかつた。基督教を信ずるやうになつてからは専ら宗教、哲學、殊に英文學の方面に興味を有つやうになり、其の方面の

研究にのみ全力を傾倒した。學校卒業後Y市に住んで居つた頃より獨逸語の研究から獨文學に入り更に獨逸思想に多大の興味を覺ゆるやうになり今に私の思想上の傾向は全然獨逸的であるやうに自分にも思はれる。禪に興味を有つやうになつたのも其の頃のこと、『碧巖錄』や『正法眼藏』に深く沈潜したのも此の時である。今尙ほ私には禪に對する根深い棄て難い趣味が生きて居る。

現代文學が勃興してからは露西亞文學や佛蘭西文學が私共の心を強く囚へて了つた。狂する許りの熱烈さが私共の魂を引づつて現代文學の深みにその渦巻きの中に私共を没頭させた。歐洲大戰の後ち思想上の傾向が文藝より社會問題、經濟問題に嵐のやうに襲うて來た。それにも係らず私の思想上の辿りはさうした問題には殆んど動かされずして私は文藝より直ちに哲學へと云ふ道を取るやうになつた。それと同時に神祕的な宗教上の深い辿りが愈々深く私の魂をその方面へ導いた。東洋の神祕思想へ獨逸の中世紀の神祕派の流れへと云ふ道を歩んだ。哲學上の方面に於ては

カントの批判哲學に出發し、新理想主義の流れを汲むウインデルバントやリツケルトやコーエンの新哲學に新しい道を見出し、殊に文化學の流れに添ふて「文化意識の哲學」へ行くところに棄て難い深い趣味を有つて居る。それと同時にベルグソン一派の體驗派の直觀哲學の魔力にも魅せられて居る。價值哲學と體驗哲學の合流が來るべき新哲學の建設ではないかと思ふ。私はそこに私の行くべき道を見出した。

神祕的現代思想の流れに於てはメエテルリンクに、音樂と詩とによつて哲學を歌つて居るものとしてはニイチエに深いものを味つて居る。

最近の私の思想上の傾向は東洋古典の光を發揮するところに自分の仕事があるのではないかと云ふやうな感じに導かれて居る。勿論西歐思想の導きによるにあらざれば到底東洋思想の神祕の奥扉は開くことが出來ないであらう。東洋思想の神祕の奥殿には他の如何なる國に於ても見出し得ない非常に尊いものが秘められてあるやうな氣もする。人類が生んだ人間生活の最深の思想がここに隠くされてあるのではあるまいか。

要するに私の歩みたいと思ふところは「神祕」の一道の外にない。私には「神祕」が一切である。一切の宗教、一切の哲學、一切の藝術は「神祕」の聖殿に於てのみ互に握手し得るのである。來るべき世界の新文明はこれから其の光を汲むべきではなからうか。一切の科學文明、一切の精神文明、泰西文明も、東洋文明も、其の究極の理想境はただこの底なき深淵のやうな「神祕」の深みよりしてのみ湧き出づるのである。「神祕」は文明の故郷である文化の母である。

(十六) 象徴の生活

眞の生活を生くるのが私共の生活である。生活のない所には人生はあり得ない。私共の生活がともすれば外部の薄つぺらな生活に流れ易く、眞の生活の深みに徹し

得ないのは私共の堪え得ざる苦痛である。低劣な生活や安價な生活を續くるのは自己に對する恐るべき侮辱である。深く生きよと私の魂は私に向つて囁いて居る。徹底的に生きよと神は私共に對して此の尊い「時」を與へてくれたではないか。この「時」を價値付け内容付け生命付け體驗附けるところにのみ眞の意味の私共の生活がある。眞の生活は私共の魂の内部から生命が溢れ出て泉み出でて、自然に私共のなかに光となり匂ひとなつて、濡れた愛のリズムが滴つて來なくてはならぬ。斯うした生活を生くるには私共の生活が「光によつて光に觸れる生活」を辿らねばならぬ私共の生活が見えざる御手に導かれて新らしい道を歩まねばならぬ。

「光によつて光に」觸れた——神の生活に觸れた——私共の魂が其の魂の呼吸を形象化し具體化して行く所に宗教生活が私共の生活に姿を表はして來るのである。「無限」そのものが生きた日常生活のなかに自己を啓示して來るところに宗教がある。基督教が宗教を語つて居るのではない、基督其の者が宗教自體を語つて居るのである。

る。教義や聖典や儀式や信條が宗教を語つて居るのではない。生命のあるところ、神に觸れた生命の躍動して居るところにのみ教義や聖典や儀式や信條が宗教を表現して居るのである。基督の宗教は基督自身が宗教的生命であつて永遠の眞理が肉と成り血と化つて居るのである。眞理が人格化して居るところ、そこにのみ宗教生活が活動して居る。教會や寺院に宗教を求めて人格の脈搏に宗教を求めないのは、石の中にパンを求むると一般、そこよりして何物をも充たされ得ないのは當然である。

私共の生くべき思想は硬化した抽象的な概念上の論理ではない。論理上の推論や考察が例へどんなによく私共に理性上の満足を與へても、其の理性の奥に情意の血が流れて居ないところには生きた思想はあり得ない。現代哲學が新理想主義に新しい光を見出したのも要するに斯うした情意主義の要求から生れたのである。新理想主義が精神味を帯び宗教味の基礎付けを有つて居ると云ふのも主知主義に對する單なる反動の聲のみ見るべきではあるまいと思はれる。人間思惟の本能的衝動の

新らしい目覺めから起つた辿りと見ねばならぬ。此の意味に於て私共は新らしい生活のうち哲學を生活化して行かなくてはならぬ。生活化することの能きない哲學は最早私共の生活には要がない。哲學によつて生活の基礎附けが與へられ、生活が深い哲學の背景を有して居る所のみ私共の生活があるのだ。書齋的概念の哲學は既に葬られて、生活に生くる哲學が私共の理想として文化の前程を照らして居るのである。

宗教や哲學が私共に生活の基礎附けを與へるのみならず、藝術もそれが單なる藝術としてある間は私共に生きた生活關係を齎らして來ない。藝術が個性の表現である限り藝術は私共の生活の中に其の力を表はすのみならず生活其のものが藝術化して來なくてはならぬ。無限が有限化する所に宗教がありとすれば、生命が美的具體化する所に藝術がなくてはならぬ。生活が生命に根ざし其の生活を具體化して行く所に生そのものの姿が美として其の足跡を示して來なくてはならぬ。新らしい藝術

が生きた人生に若い人々の胸に何等かの影を投げ響きを傳へて行くところには必ずそこに「美」の足跡が印されて居る。私共はその足跡を辿り／＼して神の奥殿に上り行くのである。美の奥殿と信の奥殿はその至聖所に於て一つ道に出遇ふ所がなくてはならぬ。

宗教と、哲學と、藝術とが「生活」の海原に流れ流れて遂に其の流れを一つにして行くところには何と云ふ偉大な莊嚴さが私共の前に驚異の眼を睜らせることであらう。プラトーンの見た世界がそれであり、エツクハルトの見た世界がそれであり、道元の見た世界がそれであり、メテルリンクの見た世界がそれである。人生の一切の仕事は此の合流を見、此の合流を自己の生活中に見出し、此の合流を抜き手を切つて泳ぎ切るところ——然り其の流れと共に自己の生活を調和附け流れに従つて流れ行く生活にのみあるのではないか。停滞するところには生活はない。硬化するところには生活はない。巧利化し便利化し散文化し單に實際化し行くところには眞の意

味の生活はない。生活は神の大愛に——然り無限の光に合流しつゝ、尙ほ自己の個性を保留しつゝ無限に向上し發展し行くところにのみ其の意義と價值とを有する。「神によつて動き神によつて生くる」ところにのみ私共の生活が色調づけられ生命附けられて行く。「我れ神と偕に在り」「我と神とは一也」。人間の目標は茲にのみ其の根本基調を有つべきである。

(十七) 聖なる闇の生活

闇ほど聖いものはない。眩いほど深い暗さのうちに私共は神を見るのだ。明るい晝の世界は人間の世界だ。暗い夜の世界は神の世界だ。夜の深い闇！ さうだそこが神の住み給ふ宮殿だ。

神は闇のなかで私共の魂を訪づれてくれる。莊嚴な夜の衣こそ神の御身を飾るに應はしい。そこには「神祕」が没薬のやうに匂ふて居る。

晝の國に住んで居るもののためには人間の生活がふさはしい生活でせう。併し夜の國に住んで居る貧しい魂の所有者にとつては聖い「闇」の生活が彼等にはなくてはならぬ生命のバンである。詩人ブレークが「日の光には人が住み、夜の光には神が住む」と歌つたのも此の邊の消息を語つて居るのではなからうか。

闇黒！ 闇黒！ 何と云ふ感じのいゝ深い響きだらう。私は幾度か斯う呼んで見る。斯うした響きのなかにのみ神の音楽が聞える。古の聖者が「玄又玄衆妙門」と云つたのも深い闇(玄)の生命に驚いた叫びではなからうか。神の姿を闇黒に見た中世紀の神祕論者も斯うした感じに觸れたのではなからうか。闇のなかに脈々として躍動して居る生命の美はしさよ！

「闇黒」それ自らは光よりも輝いて居る光明である。光明自身の本源であり深淵である。闇黒とは眞の意味に於ては「光の泉」と云ふことである。神の沐浴する光の泉はいつも闇黒の深い茂みの眞中に湛えて居る。

私共の魂は聖い闇の胸に抱かれ、育まれ、養はれてのみ生長するのだ。神の懷に抱かれて居つた聖者、哲人、豫言者、詩人、彼等の凡ては斯うした世界から生まれ来て来た子だ。

闇黒は神祕な叡智の輝きである。深遠な無知の流れである。絶對な形象の現はれである。嚙喰たる樂の音の漂ひである。「都は日月の照すを要せず。神の榮光これを照らし、羔はその燈火なり。諸國の民は都の光の中を歩み……都の門は終日閉ぢず此處に夜あることなし」と云ふ「無夜の都」は此の聖い闇の玄境にのみ輝いて居る神の都である。

限られたる私共の智識や感情や意志の活動を絶した所に神の活動が始まる。闇の世界は神自身が其の活動を開始する至聖所である。人は斯うした闇の力に導かれて神の至聖所に至り得るのである。

一切の徳も一切の信も一切の行も一切の言葉も「闇」の御手にその凡てを捧げたときにのみ純化され靈化される。「爾の右の手の爲すことを左の手に知らす勿れ」と云つたやうな境界は闇のなかに於て完成される行の生活である。樹木が其の根を地下の闇のなかに伸ばすやうに、人間の魂は其の根を闇の深いところに伸ばすことによりてのみ其の豊かさを増し其の力を加へられて来る。

深い闇黒のなかにのみ沈黙な神の言葉を聞き得るではないか。孤獨の偉大さは闇黒のなかに於てのみ其の自由さと其の永遠さとを味ひ得るではないか。

無限の否定が無限の肯定であるやうに、眞の闇が眞の光である。神と云ふ言葉や知識や思想やそれらの一切を否定し去るところにのみ眞の神が生れる。光明を否定し盡くして光明の奥に輝く闇黒の光明さに觸れたときにのみ、眞の光明を仰ぎ得るのではないか。

私は十字架の聖ヨハネと共に「靈の闇夜」Dark Night of the Soulを信ぜずに居られない。そこに私の永遠の平和な生活があるのだ。私の魂は闇の故郷に親しい懷

かしい母の乳房より流れ出づる愛の滴りを味ひ得るのである。

(十八) 「私」に徹した生活

私に取つては「私」が一切である。私のあるところのみ神が生くのである。私と離れた神は私には関係がない。如何に巧妙に神を説き得てもそれは要するに「説いた神」であつて生きた神ではない。説いた神若しくは説くべき神は最早私には要がない。私は神に生きたい。生きさへすればそれでいゝのだ。神に生くるには私が「私」に生きなくてはならぬ。

私が私に生けると云ふのは真に自己に即し、自己に徹して、自己の内部生命から湧き出づるものを擱んで生くることである。自己其の物の中に真の自己を見出しそこに新らしい生活を始むることである。創造の生活である。獨自な自律な生活のなかに自己を體驗することである。獨自的な自律な生活であるから極めて深い根柢

に其の基礎を有して居る。自己に即しながらやがて無限に觸れて居る世界である。主觀の奥に開いた客觀的な實在の世界である。

無限に深い統一された主觀の奥秘に生くる「私」の姿は私であつて最早私でない主觀の私でなくして客觀の私である。客觀性を必然的に基礎附けられた私である。個性に即して最早個性を超越した生命に生きて居る私である。私が單なる私である限りは私は生き得られない。私は私に即しながら私を超越して来る。私を超越した私が私に内在して私を生かして居る。斯うした生きた事實が生活によつて體驗附けられた時のみ「宗教」それ自らが私共の生活に芽生えをなして来るのである。

然り、今に至つて私は一切が神の働きだと云ふことを泌々と味はさせられて居る私の過去には幾多の思想上の疑問や生活上の煩悶や精神上の懊惱や信仰上の問題が日毎夜毎に私の魂に喰ひ込んで私を苦しめ私をさいなむで居つた。私は斯うした疑ひや悶ひや煩ひや問題や悩みに踏み躪られ、痛められ、虐げられ、脅かされて來た。

永い惱みの薄暗い底から私は私の單なる私を放擲すべく或る力に動かされずには居られなかつた。それは私のなかに内在して居る「生きる」と云ふ力であつた。私は何等の力のない涙にくれた寂しい憐れな一人の罪の子として地上に立つた。その時にも私の衷には「生きんとする意志」が幽かな燈のやうに輝いて写つた。私は此の幽かな一燈をせめてもの便りとして暗い道を辿つた。堪えない恐れと慄きとが私を襲つた。丁度木の葉の揺ぐやうに私の魂は揺れた。私は唯だ悲しさと恐ろしさとに**おびえ**ながら一切を投げ出した。「神よ御心の儘に」とは熱い涙と共に私の胸の奥の奥から漏れた祈りであつた。そのとき私は確に「汝の罪赦されたり」と云ふ上よりの御聲を聞いた。光が私の魂の全面に差し込んだ。寂しみのなかの満たされた心と云はうか、濡れた心の輝きと云はうか、涙ぐましい尊い気分が私の全靈を支配した。私は泣いて喜んだ。感謝の歌が自然と口から流れて出る。あゝ充たされた。御光に照らされたと云ふ意識は抑へんとして抑へ得ない。此の境に達し得たのは單なる私

の力ではない。私に内在した神の力である。光に照らされた私、衷なるものの力である。私の力が私に内在して私を超越せしめたことを私は感ぜずに居られない。私は「我に従へ」と仰せられた主の御言葉に生くることに依つてのみ宗教的生活の真理を味つた。

私の云ふ「私」とは硬い自己を主張したり、主義や思想にのみ固着して居つていつ迄も自己を棄て切らない私ではない。私の言ふ「私」は神の光に照らされて居る私である。私に取つては自分の私として自己を主張し得るやうな私のあり得る筈がない。「私のない私」とても云はうか、言葉の上に於て矛盾して居るが、斯う云ふ言葉で言ひ現はす外に言葉がない。

私に徹した生活が神に生きた生活である。私に徹しないうちは私共は未だ生活を始めて居るのではない。生活のない生存は宗教的に云へば生きて居るのではない。神に生き、私に徹した、私に生きる生活が意義ある生活であり價値ある生活である。

『善の研究』の著者西田博士は

「元來意識の統一と云ふのは意識成立の要件であつて其の根本的要求である。統一なき意識は無も同然である。意識は内容の對立によつて成立することができ、其の内容が多様なればなるほど一方に於て大なる統一を要するのである。此の統一の極まるところが所謂「客觀的實在」といふもので、此の統一は主客の合一に至つて其の頂點に達するのである。客觀的實在といふのも主觀的意識を離れて別に存在するのではない。意識統一の結果疑はん^んと欲して疑ふ能はず^ず、求めんと欲してこれ以上に求むるの途なきものを云ふのである。」

と云ふ。此の「客觀的實在」が「私のない私」であつて私を離れてあるのでもなく單なる私でもない。主客合一の頂點であつて「我れが光其の物」となつた境地である。物我一體の體驗境である。主觀的意識(私)を離れて客觀的實在(神)が存在し得ないことを博士は茲に哲學的見地から證して居る。この境地に立つて始めて永遠の

光を全身に浴びて「我は即ち生命也」と云ふ本地の風光を體得すべきである。

(十九)自由人の生活

自由人の境地に生くるのが私共の眞の生活である。

謂ふ所の自由人の境地とは何等の習慣何等の權力何等の拘束にも支配されないう自律の無上命令によつてのみ生くる境地である。本然的内部的必然の根本動向が内部的に自己を導いて生き伸びる生活である。自由人の生活は單なる自然人の要求に生くるのではない。單なる自然人の生き方は寧ろ私共の生活を發生的生物學的生理的本能的生活の向下道の一路に還元するのであつて墮落の一道を示して居る。自由人の生活は單なる理想人の要求に生くるのでもない。單なる理想人の生き方は寧ろ私共に空靈的夢幻的憧憬——の空想の一路を語つて居るに過ぎない。自然に即しながら自然を淨化し、理想に即しながら理想を具體化し「生きた人間」の道を生きた

儘に生き様とするのが私の謂ふ所の自由人の境地である。自然人を否定しながら自然人を肯定して行く道である。理想人を憧憬しながら理想人を現實化する生き方である。抽象生活であると同時に——深き意味の抽象生活寧ろ生きた抽象生活と云ふべき——又具體生活である。論理上の價值生活規範生活であると同時に經驗上の直觀生活體驗生活である。事實即價値の生活であり價値即事實の生活である。血の流れ居る儘に肉の躍つて居る儘に理想を體驗し眞理を色得して立つ生活である。現在生活を超越しながら本然の純なる表現に生くる生活である。そこには理想がやがて生活であり、生活がやがて宗教である。基督の謂ふところの「眞理」によつて得たる「自由の境地」である。生死岸頭に立つて大自在を得、一切のうちに於て遊戯三昧の境地に立ち得るのである。

ニイチエは「我は常に自らを超越せざるべからず」と云つた。「自ら」を超越することはこの自由の境地に入る道である。「自ら」に執着して居る間は永遠に私共の魂

に悶えと悩みとが集くつて居る。「自ら」を超越してのみ人は自由の境に呼吸を始め得る。無碍の一道は斯うしたところからしてのみ開け來るのであるまいか。親鸞が「念佛者は無碍の一道也」と云はれたのも此の道よりして信の奥殿に參じ得たのではあるまいか。古聖が「行いて觀、坐して看るに了として礙けなし」と云はれたのも此の一道の消息を語つて居るのであらうと思ふ。

宗教人の生活は要するに自由人の生活である。眞の自由のあるところにもみ宗教がある。習慣や、權力や、傳承やに支配されて居る外部的他律の生活には宗教はない。宗教は絶対自律の天地にのみ生くる生活である。對絶対律なるが故に絶対他律の生活とも云ひ得るのである。私は思ふ、自力なるが故に他力であると。私に取つては自力と他力とは二元の生活ではない。自律に徹するところからしてのみ他律の光明が生活のなかに匂ふて來る。否自律生活其のものが常に他律の手に支配せられ導かれ育まれ養はれて生きる道である。神なしには一切はないのである。神のある

ところにのみ自由がある。パウロが「聖靈自ら我等の靈と共に我等が神の子たることを證す」と云はれたところにのみ眞の自證内觀の生活がある。ここからして生れた生活が自由の調べを奏して私共の生活に本質的な光を添へて來ねばならぬ。自由人の生活はイブセンの所謂「一切乎然らずんば無乎」と云ふ絶對の境地よりしてのみ體驗し得べき境地である。

(二十) 哲人の生活

私の理想的生活は哲人の生活である。

所謂宗教家にあらずして宗教の奧秘に參じ、所謂哲學者にあらずして哲學の奧妙を究め、所謂詩人にあらずして詩の妙趣を味ひ、宗教と哲學と詩とが渾然一つとなつて自己人格のうちに織り込まれて生きて居ると云つたやうな人物。私の憧れて居る哲人の生活には斯うしたものが「彼」の中に生きて居る。

彼は豊かな情操のなかに呼吸をして居る。彼は塵界にありながら超然として物外に立つて生命の本源に掬んで居る。彼は貧くして富んで居る。彼は何物も有たずして一切のものを有つて居る。彼は極めてデリケートなハートの所有者でありながら何物にも動かされない意志の所有者である。彼の意識は一切の物に超越して居りながら一切の物に内在して居る。

プラトーン的生活がそれであつた。私はプラトーンの中に宗教と詩とが彼の哲學的生活を織り成してやがてそれが彼自らの生活となつて居るのを見ずには居られない。スピノザの生活がそれであつた。私はスピノザに私の魂の花環を獻げずには居られない。ガラス磨きに身を托しながらあらゆる迫害の中にあつて悠々自適自己の生くる眞理の世界に生きたと云ふことは如何にも尊貴な神に酔ふた人らしい人の生活ではないか。私は道元の人格の美に其の深い體驗と高い超越生活とに敬意を表さずには居られない。彼が當時幾多の誘ひに遇ひながら永平の奥に高く脱落の一境に立

つて一切を脚下に踏まへて立つた風光は確に人世の師表たるに價する。私はエマールソンの一生に限りなき想ひを寄する。彼がコンコルドの精舎に隠れて深い思索と體驗の中に自ら生き人を生かした生活ほど尊い生活は餘り多く見出されない。無神論者とあざけられ異端者と罵られながらも猶ほ自分の行くべき道に生きて彼こそ「世界の太陽」として輝いて居るではないか。私は哲人カーペンターを慕はずには居られない。シェフィールドの片田舎ホルムフィールドに隠れて居ながら火のやうな熱を吐いて文明を批評し愛を歌ひ生を讃じて居るあの態度の中には古の豫言者の面影さへ偲ばれるではないか。

哲人のない世界は淋しい世界である。墓場のやうな世界である。哲人のあるところのみ生命が湧き、光明が輝き、信仰が燃え、世界の人類が純真な生活に生き得るのである。

私は我邦現代の吾々の周圍に、吾々の興へられた生活のなかに一人の哲人の面影

さへも見出すことの出来ないのを寂しき居られない。單なる宗教家、單なる詩人、單なる哲學者は或は乏しくないかも知れない。併し此の三者を一人格のなかに收めて三者が一つになつて生活を生かし、人格を基礎附けて「彼」自らの中に音楽となつて響いて居ると云つたやうな人物は何處にも見出し得ない。私共の生活に空虚さと貧弱さとのみがあつて、豊富さと芳醇さの乏しいのはこれが爲めではあるまいか。平板な皮相なデモクラチックな誤られたる、上辺りした思想のみが一世を風靡して底力のある深刻な奥妙な高遠な何物も私共の魂に觸れて來ない。斯うした人格の缺乏が其の寂しさと貧しさを語つて居る故ではなからうか。私は内村鑑三氏が「深く考へて見て世に詩に勝るの寶はないのである。詩人に勝るの人物はないのである。一人のミルトンを得んがためには百千人の政治家又は經濟學者又は法律家を失ふても可い。國に一人のエレミヤを有つは大軍隊を有つに勝るの勢力である」と叫び更に「國の生命は其の詩歌である。其の先導者は其の詩人である。詩歌と詩

人となくして國民は盲人である」と叫んだのを意味深い叫びと思はずには居られない。併し私は敢て云ふ「我一哲人を與へよ、さらば百萬人を失ふも敢て辭するところにあらず」と。眞の詩人、眞の哲人、眞の豫言者のない所には眞の高遠な理想や深玄な信仰は生れない。そこには夢と幻とがない。理想なく、信仰なく、夢なく幻のない國家は滅び行く外に道がない。

私はただ哲人の生活に憧れて居る。哲人生れずんば私共の生活は闇から闇に葬らるるの運命を齎らすべきではなからうか。

◆われ既に取れり、既に全うせられたりと言ふにあらず、唯だこれを捉へんとて沮ひ求む。基督は之を得させんとて我を捉へたまへり。(ピリピ書三ノ十二)

◆「彼」は萬物を己に服はせ得る能力によりて我等の卑しき状態の體を化へて己が榮光の體に象らせ給はん。(同書三ノ廿一)

◆それ神の満ち足れる徳はことごとく形體をなして基督に宿れり。(コロサイ書二ノ九)

第三編「現實の彼岸より」

創造の歡喜

元始に神天地を創造し給へり。(創世記一ノ一)

Au commencement Dieu créa le ciel et la terre.

神が此の宇宙を創造したのか、宇宙は自然に出來たものか、さう云つたやうな哲學上の問題乃至神學上の問題に、今私は觸れやうとして居るものではありません。私は創造そのもののなかに流れて居る歡喜の泉を掬んで味ひたいのであります。

ヘブライの詩人が此の天地は神の意志によつて創造されたものと見たのはあの名高い詩の第十九編のなかに歌つて居る「もろくの天は神の榮光を顯はし、穹蒼はその聖手の所作を示す」と云ふ言葉によつても想像することが能きますが、彼等は

素朴な宇宙観自然観によつてかく見たのでありませうが、今、私共は此の宇宙を盲目的な勢力、自然的なエネルギーの發現と見るよりも、寧ろ此の宇宙は具體的な絶對意志の直接なる發現と見るところに宗教的な見方の領域があると思ひます。即ち神は創造するものであつて自らは創造されぬものであります。宇宙は創造されたものであつて自らは創造するものではありません。最も直接なる絶對自由の意志は自律的な創造者それ自らであります。宇宙は絶對自由な意志の所有者が自己發展の過程史であり、生命發展のプロセスであります。茲に「時」は流るる時として其の生命の水路を示して居るのであります。宇宙が意志發現の過程でありとすれば力の世界たる自然より文化の世界たる人格への進路が——意識的・道德的の——曙の光の如くに明け初めて來ねばならぬと思ひます。絶對自由の意志そのものが自己認識の姿として——實在が生成の相として——發展の一步／＼を踏みしめて具體的自己へ向つて進み行くのであります。文化意識への行路が即ち生命の行路でなくてはならぬ。

生命への意志の進展は即ち文化への意志の進展であり、文化への意志の進展はやがて人格への意志の進展であります。そこには自己内返^{レフレクシオン・イン・ジツヒ}の世界があり他^{レフレクシオン・イン・アンデレス}者内返^{レフレクシオン・イン・アンデレス}の世界があります。自己が即ち無限の他己であります。自己内展が發展であり、自己發展がやがて超入の領域であらねばならぬと思ひます。神は斯うした領域に於て創造の事業に従事し給ふのではありますまいか。換言すれば神の宇宙創造は神の自己創造であり、神の自己創造は神の内發自展であります。そこに無限の歡喜がなくはならぬ。詩人ブレークが其の最後の畫筆に依つて描かれた「神」と題する作に於て、彼は其の作の中に創造の歡喜を表現して居ります。今、神は渾沌の無より太初の大地を創造しやうとして居るのであります。太陽の光は燦として輝いて居ります。暗雲が大空に其の色を漂はせて居ります。神は今、太初の劫風に其の髪の毛を靡かせながら左手を長く延ばして大地の周圍を定めやうとしてコンバスの度を擴げて居ります。そこには無限の力と無限の生命とが創造の歡喜のなかに躍つて居り

ます。此の作は彼の最後の作であると共に彼の最大な作品であります。彼は此の作を描きながら輝く歡喜のなかに酔ふて居つた。「神」の創造の歡喜が彼自らの創造の歡喜であつた。彼は神の光を見ながら、神の聲を聞きながら歡喜に浸つて音樂のリズムのなかに、然り感謝の讚美のなかに此の大作を書き上げたのであります。而して彼は憧れ慕ふて居つた神の國を面りに眺めつゝ、其の美と其の尊さと嚴かさ々とを謳へつゝ靜かに天上の人となつて、永遠に地上の生活に其の別れを告げたのであつた。彼の終焉の光景は神の光の輝きを私共の胸に深く刻み込んで居ると共に、彼の人格の鮮かな印象が「創造」そのものの姿となつて匂ふて居るではありますまいか。創造の歡喜は永遠の歡喜であります。生も死も創造の歡喜の前には新らしい裝ひをなして躍つて居ります。創造の歡喜は過去を流れ、現在に溢れ、未來永遠の世界を潤ふて限りないのであります。そこに神の凱歌があり、そこに人間生活の勝利があります。

詩人の創造的意識の迫りは私共をして絶対意志の表現としての神の活動を直觀せしめずには已まないものであります。即ち神の絶対意志の表現は端的に絶対行動となつて實現されて居ります。「神、光あれと言へ給へければ即ち光ありき」。茲には意志と實現とが一つに融合して居ります。意志即事行の世界であります。主觀即客觀の世界であります。内界が直ちに外界と化て居ります。經驗以前の原經驗と云はうか知識以前の體驗の境と云はうか、一切は永遠の意志であり同時に永遠の行爲であります。無限の統一性が無限の發展性を内藏し、無限の可能性が無限の現實性を保有して居る。宗教の領土は斯うした境界に於て初めて其の眞姿を如實に語つて居るのであります。茲では一切萬有の誕生が永遠の歡喜のうちに圓現されて居ります。歡喜のみが一切の母であります。詩人の謂ふところの「歡喜こそ、我が名なれ」 Joy is my name と云つたのが此の心境を云ふのでありませう。赤子の至純な境地に入つた者のみに許された歡喜の賜がここでは味ひ得らるのであります。生命それ自ら